
ISとエンジェロイド

ゴースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISとエンジェロイド

【Nコード】

N1026T

【作者名】

ゴースト

【あらすじ】

女性にしか反応しないISがなぜか使えることを知られ、強制的にIS学園に入学することによって……なおこの作品は、『恋姫とエンジェロイド』の主人公が役目を終えて新たに旅立つ物語です。

タイトル変更しました。

プロローグ

「あれ、ここは確か・・・」

なんとなく見慣れた景色だが思い出せない。

「ここは、私と貴方が出会った場所です」

そういえば貴女は、

「ダイダロスさん、何故俺はここに？」

「貴方はあの世界での役目を終えたので、ここに呼び戻しました」

「それで、今度はどういった用事で？」

「あなたに別の世界に行ってもらいたいの」

「それはいいが、どういった世界だ？」

「ISってところよ」

「それで俺と一緒に乱世を生きたあの子達は？」

「もちろん、貴方の転入時に会えるわよ。それに、貴方の専用機を用意するけど、どんなのがいい？」

「オリジナルのGNドライブを持つ機体だな。例えば、エクシア

からダブルオーやアリオスからセラビィーみたいな感じで頼む」

「分かったわ。後、第四世代の武器は、最終決戦用にしておくと、身体能力強化と並列処理できるようにしておくから、安心してね」

「色々用意してもらってすまない」

「いいのよ、気にしないで。それじゃあ、頑張ってるね」

「ああ」

そう言って目を瞑ると、眩い光が俺を襲った。

第一話 クラスメイトはほぼ女！？

今、俺は大変な目にあっている。あの後、光に襲われ気が付くと空に放り出され、ただいま急落下中だ。

左手を見ると、指先のない手袋みたいな形のISが、現在待機状態になっている。

「しかたない、GUNDAM起動」

そう呟くと、ISが光って全身装甲のOガンダム（実戦配備型）になった。

ゆっくり降下していると、一人の女性がこちらに近づいてきた。

「こんなところで何をしている？」

と言ってきたので、俺はISの展開を解いて、

「ISに慣れるために、空を飛んでいた」

「そうか、お前には明日からIS学園に通ってもらおう。とりあえず、ついてこい」

「はあ、いいですけど」

「そういえば自己紹介がまだだったな。私は織斑千冬だ、お前は？」

「俺は山下航です」

「とりあえず、今日はホテルからIS学園までの道案内しておく。明日は遅刻するなよ?」

「はい、分かりました」

一通り案内された後、ホテルの前で別れた。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRショートホームルームはじめますよー」

黒板の前で女性副担任の山田真耶先生が簡単に自己紹介をしてそう言った。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

教室の中は変な緊張感に包まれ、誰も反応しない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ちよつとつろたえている副担任がかわいそうだが、残念だがそんな余裕は全然ない。なぜなら、俺と目の前にいる男以外全員クラスメイトが女子だからだ。

しかもこれは、想像以上にきつく席が、真ん中で前から二番目だ

から、俺らに視線を感じる。目立つ上に注目も浴びて、居心地が悪い。

「……………くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいつ!?!」

考え事でもしていたのか、いきなり大声で名前を呼ばれ、声が裏返っている。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる? 怒ってるかな? ごめんね、ごめんね! でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ごめんね? 自己紹介してくれるかな? だ、ダメかな?」

副担任の山田先生がぺこぺここと頭を下げていた。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……………っっていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当? 本当ですか? 本当ですね? や、約束ですよ。絶対ですよ!」

そう言われ、目の前の男は、また注目を浴びている。やがて立ち上がり、後ろを振り向きクラス中の視線にたじろいでいた。

「え……………えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

と言い、一礼し何か考えているようだ。それもそのはず、この男に『いろいろ期待しています』みたいな雰囲気になっているのだから。

「……………」

いまだに黙っており、やがて観念したのか息を整え、

「以上です」

と言った直後、がたたつ。と期待した通りの反応をしてくれた音が、俺の後ろから聞こえた。

「あ、あの……………」

前の男の背後から声をかけられ、その後パンツ！ と頭を叩かれたようだ。

「いつ——！？」

と言い、前の男は声が出た方に振り向き、

「げえっ 関羽!？」

と叫んだら、パンツ！ また叩かれている。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

と言い、山田先生が、

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「い、いえ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

と会話している。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

とメチャクチャなことを言ってる気がする。しかし、

「キヤーーーーー！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

いくらなんでも騒ぎ過ぎだと思う。それと最後の奴それはないだろ。

「……………毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

たぶんそうだと思う。嫌なら学長に聞いたらどうだらうか？

「きゃああああっ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも、時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をしてく！」

ここは調教する場所じゃないのだが……………

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は——」

パンツッ！ 本日三回目である。

「織斑先生と呼べ」

「……………はい、織斑先生」

とそんなやりとりを見ていると、

「え……………？ 織斑くんって、あの千冬様の弟……………
？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていうのも、

それが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

おい、最後のはさすがに無理だろう。

ちなみに、俺が『IS』を使えるのは、公表してないため、知っているのは織斑先生だけである。

しばらくして俺に回って来た。

「俺は山下航。趣味は読書と家事。それに専用機持ちだ。よろしくお願いします」

周りから「えっ、あの人もつかえるんだ」とか「このクラスに二人も！」とか聞こえたが、今は無視だ無視。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

いきなり理不尽なことを言ってる。

「席に着け、馬鹿者」

織斑は、また注意を受けていた。

第二話 クラスメイトはほぼ女！？2

ただ今、一時間目のIS基礎理論授業が終わったの休み時間。なんともしえない雰囲気戸惑いを隠せそうにない。俺以外唯一の男に挨拶でもしておく。

「君は、織斑一夏でよかったよね？」

「ああ、山下航か。俺のことは一夏でいいぜ」

「そう？　じゃあ俺も航でいい」

「わかった。それはともかく、助かった。他にも男子が居てくれて」

「なに、俺もそうさ」

その後、会話をしているよ、

「………ちょっといいか？」

「え！？」

「ん？」

「いや、一夏に用があるのだが」

「そう、一夏行っていい」

「悪いな、行って来る」

そう言って篠ノ之さんは、一夏を連れて廊下に出て行った。

することもないので、とりあえず次の授業で使う教科書に目を通す。

一夏の全部わからない発言は面白かったのだが、俺まで参考書をもらうはめに。

二時間目の休み時間。一夏と会話をしていると、

「ちょっと、よろしくって?」

「ん?」

「へ?」

正直こつこつタイプの間は苦手だ。

「訊いてます? お返事は?」

「あ、ああ。訊いてるけど………どついつ用件だ?」

一夏が鬱陶しそつに答えると、

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

やばい見た目以上にこも人は苦手だ。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「一夏、この人は、セシリア・オルコットさんだよ。確か、イギリスの代表候補生だったはずだ」

「ふーん。あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたつ。クラスの女子数名がずつこけた。案外ノリがいいな、このクラス。

「あ、あ、あ………」

「『あ』？」

「あなた、本気でおっしゃってますの!？」

「おう。知らん」

「一夏、簡単に言えば、その国の代表の候補生なんだ。要はその

国のエリートというわけ」

「うん。わかりやすいな」

「そう！ エリートなのですわ！」

びしっと一夏に人差し指を向けている。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「それは幸運だな」

「……馬鹿にしていますの？」

うん。俺は馬鹿にしてるけど。

「大体、あなた達ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男二人でISを操縦できるときいていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「勝手に期待しても迷惑なんですけど」

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなた達のよう

な人間にも優しくしてあげますわよ」

おお、おもいっきりありがた迷惑だが。

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

一部強調していたが気にしない。

「入試って、あれか？ ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」

「は……」

「そうなんだ。俺は織斑先生に昨日、ISを展開してたのを見られたからスカウトされたけど」

「航、千冬姉を知ってたんだ」

「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと……」

「いや、知らないけど」

「あなた！ あなたも教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ。たぶん」

「はつきりしろよ、一夏」

「たぶん！？ たぶんってどういう意味かしら！？」

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていらねー」

キーンコーンカーンコーン。

「残念だったな、オルコットさん」

「っ………！ またあとで来ますわ！ 逃げないことね！
よくって！？」

なんだか負け犬が吠えてるみたいに聞こえるのは俺だけだろうか。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

「一、二時間目とは違い、織斑先生が教壇に立ち、よほど大事なのか山田先生までノートを手に持っている。」

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふむ。クラス対抗戦の代表者か。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと周りが色めき立つ。

「はいっ。織斑くんを推薦します!」

「私もそれが良いと思いますー」

早速一夏が選ばれている。

「では候補者は織斑一夏……他にいないか? 自薦他薦は問わないぞ」

「はいっ。私は山下くんを推薦します!」

「私も山下くんが良いと思います!」

「お、俺!？」

突然一夏が立ち上がった。俺の名前が出た時点で既に諦めている。

「一夏、何事も諦めが肝心だ」

「なんでお前は落ち着いているんだよ。ちよっ、ちよっと待った! 俺はそんなのやらなー」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでもー」

未だに一夏が反論するが誰かが遮った。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

パンツと机を叩いてオルコットさんが立ち上がった。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

そう思っているのは多分、貴女だけです。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

俺はなんだかいい感じにキレかけてる。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

オルコットさんは、さらにヒートアップしている。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛でー」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「大した開発技術もないくせに偉そうに言うなよ貴様！」

「なっ……！！？」

「いいぞ一夏。もっと言ってやれ。」

「あっ、あっ、あなた達ねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「貴様が先に侮辱したんだろっが」

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「それで白黒はつきりつけてやる」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？ 何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会

ですわね!」

「ハンデはどのくらいつける」

「あら、早速お願いかしら?」

「いや、俺達がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

と、一夏がそこまで言うとかラスから笑いが起きた。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの?」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ?」

「織斑くん達は、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

俺はともかく一夏が心配だなあ。

「……じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

先ほどの怒りは消え、嘲笑を浮かべている。

「ねー、織斑くん達。今からでも遅くないよ? セシリアに言うて、ハンデ付けてもらったら?」

「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはなくていい」

「えー？ それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも、知らないの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットと山下はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

織斑先生が手を打って話を締める。

「じゅうじゅう」

放課後、一夏は机の上でぐったりしてる。

「い、意味がわからん・・・・・・・・。なんでこんなにややこしいんだ」

「一夏、部屋が決まったら俺の部屋に来いよ」

「あ、ああ」

一夏とこれからのことを話をしていくと、

「ああ、織斑さんと山下くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

「何の用ですか？」

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーをそれぞれに渡す山田先生。

「俺達の部屋、決まってなかったんじゃないですか？ 前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「俺もホテルから通学するって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです」

「それで、部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないし、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら・・・」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

『ど、どうもありがとうございます・・・』

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器が

あればいいだろう。山下の荷物もホテルから手配しておいた」

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシヤワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑くん達は今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

「お、織斑くんっ、女子とお風呂入りたいんですか！？ だっ、ダメですよー！」

「い、いや、入りたくないです」

「ええっ？ 女の子に興味がないんですか！？ そ、それはそれで問題のような……」

一夏が面白いように弄られている。俺は笑いを堪えるのに必死だ。

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これぞ。織斑くんと山下くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くつちゃダメですよ」

貴女は俺達の母親ですか？なんて口には決して出さない。

俺と一夏は寮に向かって歩きだした。

「えーと、ここか。1025室だな」

「ふーん。俺は一夏の隣の部屋か」

俺はドアに鍵を差し込みロックを解除する。早速窓を開け部屋の空気を入れ替える。しばらくすると、空から三人がこちらに向かつて飛んで来た。とりあえず窓から離れ、三人が来るのを待つ。三人が窓から入って来ると、その子達は俺の知り合いだった。

「お久しぶりです、マスター」

「おう。久しぶりだな、イカロス、ニンフ、アストレア」

「ふん、仕方がないから来てやったのよ」

「はいはい、また会えて嬉しいよ。織斑先生に君達が来たことを知らせるからついてきて」

『はい、マスター』

そう言つと、黙ってついてきてくれる。四人で職員室に向かうと帰り支度をしている織斑先生がいた。

なんとか話をつけ、彼女達を俺の部屋に住ましてもらおう代わりにイカロスとアストレアは、一夏と俺のISの訓練相手を務めるようになり、ニンフは戦闘時のサポートをすることになった。

第三話 クラス代表決定戦！！

イカロス達が来てから、翌週の月曜。クラス代表を決める日。

決闘は俺対オルコット。次に先ほどの勝者対一夏となった。

「・・・なあ、篤」

「なんだ、一夏」

いつの間にか、互いを名前で呼び合う仲になっている。隣が五月蠅かったから無視してたけど。

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。気のせいだろう」

「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「目をそらすな」

「し、仕方がないだろう。お前のISもなかったのだから」

「まあ、そうだけど・・・じゃない！ 知識とか基本的なこととか、あつただろ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「目をそらすなっ」

「夏専用のISは今もまだ来ていない。」

「……………」

「……………」

ちなみに俺はイカロスに習ったところを、解りやすく教わっていた。……………決して忘れていた訳ではない。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

三度も呼びながら、第三アリーナに駆け足で山田先生がやってきた。

「先生、落ち着いて。用件はなんですか？」

「えっ、山下くん。あっ、それですねっ！ 来ました！ 織斑くんの専用IS！」

「織斑、山下が戦っている間に準備を済ましておけ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。山下もそろそろ行け。相手は待ちくたびれているぞ」

「了解した。……………GUNDAM、起動」

左手が光り、全身に装甲を纏う。

ゲートに向かい、出撃するとオルコットが既に待っていた。

「あら、逃げずに来ましたのね」

何か言ってるが気にしない。機体な『ブルー・ティアーズ』、武器は『スターライトmk?』か。

「最後のチャンスをあげますわ」

「いらない」

そう言い、ビームガンとシールドを構える。

「そう？ 残念ですわ。それなら………お別れですわね！」

Oガンダムに向かってレーザーを撃ってくるが、俺はそれを回避し、避けている間にビームガンでビームを二発撃つ。

「くっ、なんて威力ですの。でもこれからですわ。踊りなさい。わたくしとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲ワルツで！」

どんどん撃ってくるがどれも中らない。このままでは、不利になると判断したのが、『ブルー・ティアーズ』を四機射出してきたが、

「甘いっ—！」

と言い、ビームで四機全て破壊した。

「そんなっ。それでも」

再びレーザーを撃ってくるが、回避中にビームを撃つ。

ビームが何発か当たりオルコットのシールドエネルギーが残り三桁を切った。俺はビームガンを左手に持ち替え、背部からビームサイベルを取り出し、一気に接近する。

「かかりましたわ。ブルー・ティアーズは六機あつてよ！」

そう言つて、ミサイル型のブルー・ティアーズを撃ってきたが、そのまま加速し、ビームサイベルで切り裂き懐に入る。

「これでトドメだ！」

「きゃあああああ!？」

その直後、オルコットの装甲とスターライトmk?を破壊し、シールドエネルギーを0にする。

『試合終了。勝者・・・山下航』

「そんな・・・わたくしが、一撃すら与えることも出来ずに、敗れるなんて・・・」

「貴様は自分がエリートだと思つから負けたんだ。それをなくし、油断もしなければ、これからも伸びるはずだ」

「はい」

「さて戻ろうか。・・・更に強くなつたオルコットさんと戦えることを期待している」

「はい！ わたくしも強くなって航さんと戦えるのを心待ちにしておりますわ」

そこまで話すとオルコットと共に俺が出てきたピットに戻る。

「それにしても強いな、航は」

「そうでもないさ。今回は相性が良かったから、勝てただ」

「まあいいさ。俺も全力で戦うさ」

「なかなか言うじゃないか。面白い、本気で相手してやる。一夏、俺は先に行くぜ」

と言って、空中に向かって行き、ファースト・シフト一次移行を実行する。

「そんな、わたくしと戦っていたのは初期設定の機体だなんて信じられませんわ」

「ほう。初期設定の機体で代表候補生を下すとは、なかなかやるな」

ファースト・シフト一次移行を終えると一夏が空中にやって来た。

「いくぞ、航」

「来い、一夏。……………エクシア、目標を破壊する」

『はあああああああ！！』

直後、雪片式型とGNソードがぶつかり、力が拮抗する。俺はその隙を逃さずに左手首からGNバルカンを連射し、距離を取る。

「一夏、隙あり」

「なっ」

一気に距離を詰めGNソードで雪片式型を弾き飛ばし、両腰にあるGNブレイドを投げ当て、GNビームダガーを二本突き刺し、GNビームサーベルを二本刺して持ち上げ、

「これで終わりだ！」

GNソードを下段から上段に向けて切り上げ、一夏のシールドエネルギーを0にする。

『試合終了。勝者……山下航』

「一夏油断しすぎ。いくら俺と同じ近距離戦にしても、上手く立ち回れるのに」

「くそ、一撃入れれるところがあったのに」

「安心しろ一夏。俺達がお前を鍛えてやる」

「ああ、是非とも頼む」

切りのいいところで話を止め、アリーナの更衣室で着替え、寮に戻る。

翌日、朝のSHR。山田先生がクラス代表の発表を行った。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です」

クラスメイトが大いに盛り上がっている中、一夏だけが暗い顔をしている。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは、俺とオルコットさんが辞退したに決まっているだろ」

「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして“一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの。それに“航さん”と一緒に訓練したら、効率が良さそうですねから」

「いやあ、セシリアわかってるね！」

「そうだよねー。せっかく世界で唯一の男子がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑くんは」

よかったな、一夏。

「静かにしろ、馬鹿ども」

織斑先生の一声で途端に静かになるクラスメイト。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はーいと一夏以外のクラス全員一丸となって元気良く返事をした。

第四話 転校生は一夏のセカンド幼なじみ!?

四月下旬、桜の開花時期も過ぎ、今は織斑先生の担当の授業を受けている。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、山下。試しに飛んでみせろ」

(GUNDAM、起動。モード、エクシア)

オルコットさんと俺は展開を済ましたのに、一夏がもたついている。

少ししてから一夏も白式を展開した。

ところで、なぜ俺だけ浮遊してないんだろ？

「よし、飛べ」

そう言われ、俺とオルコットさんは急上昇し、程よいところで静止して一夏が来るのを待つ。

「何をやっている。スペック上の出力では山下の機体はともかく、白式の方が上だぞ」

一夏が早速怒られている。昨日急上昇と急下降を習ったのにその日に練習してないのかな、一夏は？

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を

模索する方が建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ。それに航のISは翼がないのに飛べるんだ？」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？ 反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「俺の説明すると長くなるが良いのか？」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

「一夏にしては、賢明な判断だな」

「くつ、正論だから反論できない」

「一夏っ！ いつまでそんなところにいる！ 早く降りてこい！」

地上で山田先生が持っているインカムを篠ノ之さんに奪われていた。ちなみに、ISのハイパーセンサーによる補正のおかげで地上がくつきり見える。

「ちなみに、これでも機能制限がかかっているんでしてよ。元々ISは宇宙空間での稼動を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握するためですから、この程度の距離は見えて当たり前ですわ」

さすがは優等生。長々と説明お疲れ様です。

「織斑、オルコット、山下。急下降と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、航さん。お先に」

言つて、すぐにオルコットさんは地上に向かい、完全停止をやつてのけた。

「それじゃ、一夏。先に行くぜ」

と言い残し、一気に急下降する。

「ちつ、地表十一センチか」

俺は上を見上げると、一夏が急下降しているが体勢を上手く変えられず、地上に墜落した。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言つた。グラウンドに穴を開けてどつする」

「……………すみません」

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやつただろう」

篠ノ之さんが一夏に説教を始めた。とりあえず、授業中なので一夏に助け舟を出すことにする。

「大丈夫か、一夏」

「あ、ああ。大丈夫だ」

「織斑、オルコット、山下は始めから展開しているからいいとして、武装を展開しろ」

『はい』

オルコットさん、一夏の順に武器を展開した。

「織斑は遅い。〇・五秒で出せるようになれ」

一夏には、武器を速く展開できるようになってもらわないと、それだけで試合に左右されるからなあ。

「セシリアはさすが、代表候補生といったところか。――ただし、そのポーズはやめる。横に向けて銃身を展開させて山下を撃つ気が。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な

――」

「直せ。いいな」

「――、・・・・・・はい」

ちなみに俺は、オルコットさんの銃身に対してGNシールドを構えている。いつ撃たれるかわからないからな、このくらいの警戒はしてもいいと思う。

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

そう言われてもすぐに近接用の武器は出ないみたいだ。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。――ああ、もうっ！《インターセプター》！」

ヤケクソ気味に叫ばないと出ないのか。……オルコットさんも初めは一夏と同じ訓練メニューだな。この時オルコットさんは、寒気がしたとかしなかったとか。

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待つてもらおうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。山下との対戦で簡単に懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その……」

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

一夏が篠ノ之さんを見るが顔を逸らしたようだ。

「一夏、一人で頑張ってたな。俺は先に戻るから、授業に遅れるな

「よ」

と言って、アリーナの更衣室に着替えに戻る。後ろで一夏が何か言ってるが気にしたら、負けだろう。

「というわけです！ 織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう〜！」

一夏の頭上に向けて、クラッカーを乱射する。イカロス達と夕食を取った後、食堂にやって来るとこの有様だ。壁を見ると、デカデカと『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書いた紙がかけてある。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

さつきから相づちを打っている女子は、うちのクラスにはいないのに俺と一夏以外、気付かないのだろうか。しかも、明らかに三十名以上いるんですけど。

「人気者だな、一夏」

「……………本当にそう思うか？」

「ふん」

篠ノ之さんの機嫌が悪いけど、また一夏が何かやらかしたのだから。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君と山下航君に特別インタビューをしに来ました〜！」

あれ？ いつの間に俺は有名に？ ああ、決闘をした日からか。

「あ、私は^{トウキョウ}黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

この歳で名刺持つてるんだ。

「ではではぜひ織斑君！ クラス代表になった感想を、どうぞ」

「えーと……………まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ〜。俺触るとヤケドするぜ、とか！」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

「夏、それはどうかと……」

「じゃあまあ、適当になつ造しておくからいいとして」

ねつ造は犯罪のような……」

「次は、山下君ね。どうしてクラス代表を辞退したの？」

「理由は簡単。一夏の経験値稼ぎのため」

「ふーん。これも適当になつ造しておくとして。セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

そうが言っても気合が入っているのは、誰の目から見ても丸わかりだろう。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかというと、それはつまり……」

「ああ、長そつだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさいー」

「いいよ、適当になつ造しておくから。よし、山下君に惚れたからってことにしてあげよう」

「なっ、な、ななっ……………!?!」

顔を赤くするオルコットさん。余計な事は言わない方がいいだろう。

「とりあえずさんにん並んでね。写真撮るから」

「えっ?」

「注目の専用機持ちだからねー。スリーショットもらっよ。あ。手を重ねるといいかもね」

「そ、そうですか……………。そう、ですわね」

突然モジモジし始め、ちらちらとオルコットさんが俺を見てくる。今のところはスルーだスルー。

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね?」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて…」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

黛先輩は俺と一夏の手を引いて、その後に行くオルコットさん。そのまま手を重ねるところまで持って行く。ちなみに、一夏、俺、オルコットさんの順に手を置いていく。

「……………」

「……………なんだよ、篝」

「何でもない」

篠ノ之さんがごつちを見てくるので、一夏とオルコットさんに気付かれないように、篠ノ之さんを手招きする。俺の意図を理解したのか頷いてくれた。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え？ えつと……………2？」

「ぶー、74・375でしたー」

パシャッとデジカメのシャッターが切られる。

「なんで全員入ってるんだ？」

篠ノ之さんが入ってきてくれるのはいいが、何故他のメンバーも？

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

口々にオルコットさんを丸め込んでいる。

「う、ぐ………」

ともあれ、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は十時過ぎまで続いたらしい。らしいというのは八時過ぎに部屋に戻り翌日、一夏本人に聞いたからだ。

「織斑くん、山下くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝。俺と一夏は、席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。

「おはよう。転校生？ 今の時期に？」

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら
それはさすがにないだろう。」

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？ 騒ぐほどのことでもあるまい」

「どんなやつなんだろうな」

「む……………気になるのか？」

「ん？ ああ、少しは」

「ふん……………」

「案外、一夏の知り合いだったりして」

「それはないだろう？」

「そうか？」

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そうだな。よし、一夏。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をするから、楽しみにしている」

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！ 一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよ！」

「負けたら、更に厳しくするから覚えておいて」

俺、オルコットさん、篠ノ之さん、クラスメイトが好きなことを口々に言う。

「織斑くん、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

「……その情報、古いよ」

教室の入り口から声が聞こえた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組んでドアにもたれている知らない女子。

「鈴………？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「何格好付けてるんだ？ すげえ似合わないぞ」

「んなっ………！？ なんてこと言うのよ、アンタは！」

「おい」

「なによ!?!」

バシンッ! 訊き返した相手が悪かったな。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

さつさとドアからどく凰さん。明らかに織斑先生を恐れているが、過去に何かあったのだろうか?

「またあとで来るからね! 逃げないでよ、一夏」

「さつさと戻れ」

「は、はいっ!」

一組に急いで戻って行った。

「っていつかアイツ、IS操縦者だったのか。初めて知った」

「……一夏、今のは誰だ? 知り合いか? えらく親しそうだったな?」

篠ノ之さんを始め、クラスメイトが一夏に質問している。

バシンバシンバシンバシン！とその後に関こえたのは言うまでもない。

「席に着け、馬鹿ども」

今日もいつも通りの一日が始まる。

放課後の第三アリーナ。今日も俺とオルコットさんで一夏の特訓をしていると意外な人物がやってきた。

「な、なんだその顔は……おかしいか？」

「いや、その、おかしいっていうか……」

「篠ノ之さん！？ ど、どうしてここにいますの!?!」

俺達の前に打鉄うちがねを装着、展開している篠ノ之さんがいた。

「どうしてもなにも、一夏に頼まれたからだ」

「一夏、準備は出来ているな？ 篠ノ之さん、オルコットさん始めようか」

『はい(ええ)』

「ちよつ、俺の意思はああああー」

結果、三人によって一夏は、ボコボコにされたのはいつまでのない。

「今日はこのくらいでいいだろう」

「お、おつ……………」

ぜえぜえと一夏が息切れしているのに対して、篠ノ之さんは多少疲れているが一夏ほどではないし、俺とオルコットさんは全く疲れていない。

「ふん。鍛えていないからそうなるのだ」

「よし、訓練メニューに体力強化も加えようか？」

「いや、今のままでいい」

「何をしている、早くピットに戻れ」

「お、おつ……………つて、箒？　なんでこつち側に来るんだ？」

「私もピットに戻るからだ」

「いや、セシリアの方に・・・」

「び、ピットなどどっちでも構わないだろうー!」

と、そんなやりとりがオルコットさんとピットに戻っていると聞こえた。

「航さん、わたくしのことは“セシリア”と呼び捨てで呼んでくださいまし」

「ああ、わかった。それでセシリアは、近接武器の展開速度は上がったのか？」

「ええ、ようやく一秒以内に出せるようになりましてよ」

「じゃあ次は、懐に入られてもある程度こなせるようになるかな」

「その時はお願いしてもよろしいですか？」

「いいぜ。近接専門の相手を用意しておく」

「それは楽しみですわ」

セシリアと接近戦の相手をすることを約束してピットを後にする。

ところ変わって夕食を終えて午後八時過ぎ。いつものようにイカロスに授業で習ったところを再び教えてもらっていると、

「ふ、ふざけるなっ！ 出て行け！ ここは私の部屋だ！」

「『一夏の部屋』でもあるんでしょ？ じゃあ関係ないじゃん」

と大声で隣が話しているため集中できそうにないのでイカロスに断りを入れ、隣の部屋に訪れる。

「うるせーぞ貴様ら！ もう少し静かにできないのか？」

三人に向かって怒鳴ると、

『す、すみません』

と謝ったので黙って自分の部屋に戻ろうとすると、

「ところでアンタ誰なのよ？」

「一夏、説明してないのか？」

「ああ悪い。忘れてた」

「はあ。はじめまして、凰鈴音さん。俺は山下航、一夏と同じクラスに男で二人目のIS操縦者だ」

そう言って一夏達の部屋を後にし、自分の部屋に戻りイカロス達と雑談してから寝た。

翌日、生徒玄関前廊下に張り出された紙を見ると、『クラス対抗戦日程表』と書かれていた。しかも何の因縁なのか一回戦の相手は二組だった。

第五話 対決！！クラス対抗戦

対戦表が発表されてから数週間どうやら一夏と凰さんが、喧嘩をしたみたいだ。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だな」

「試合当日まで座学をやるから覚えててね」

それから放課後、一夏の特訓のため第三アリーナへと向かう。

メンバーは俺と一夏、篠ノ之さん、セシリア、イカロス、ニンフ、アストレアで特訓をしている。

ちなみに、イカロス達を紹介したとき驚かれ、イカロスとアストレアを相手に三対二で一夏達と模擬戦をさせたところ、二人が一夏達を圧倒したからさらに驚いていた。三人ともISなしで飛び、イカロスとアストレアについてはISと互角以上の戦闘力があつたから驚くのは仕方ないだろう。

しかし運が悪いことにこの光景を見たクラスメイトがいて、翌日このことが学園に広まってしまい、先輩から質問されたが何とか誤魔化すことが出来た。それ以来、俺達の特訓風景を見る人が増えた。

話は変わって俺達は、第三アリーナのピットにいる。一夏がドアセンサーに触れ、ほんの数秒でドアが開いた。

「待ってたわよ、一夏！」

どうやら鳳さんが待ち伏せしていたようだ。

「貴様、どうやってここに……」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ」

「あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね」

関係者違いだと思っただ、鳳さん。

「ほほう鳳、どういふ関係かじっくり聞きたいものだな……」

「・」

「で、一夏。反省した？」

「へ？ なにが？」

「だ、か、らっ！ あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねえ……じゃあなに、女の子が放っておいてっ
て言ったら放っておくわけ!？」

「おっ」

一夏、それはいくらなんでもないだろう。

「なんか変か？」

「変かって……ああ、もうっ！ 謝りなさいよ！」

「だから、なんでだよ！ 約束覚えてただろうが！」

「あっきれた。まだそんな寝言言ってるの！？ 約束の意味が違
うのよ、意味が！」

いつまでこんなやりとりが続くのだろうか？ まだ続きそうなの
で、俺達は先に行くことにする。

「一夏、まだ続いたら俺達は先に行って始めてるぞ」

「ああ悪い。先に始めてくれ」

一夏から許可を貰ったから、一夏と凰さん以外の皆でアリーナに
向かう。

「さて今日は、イカロスとセシリア、篠ノ之さんとニンフ、俺と
アストレアでそれぞれ模擬戦をする。一夏がここに来るまで続ける。
それでいいね」

「ああ／ええ」

『はい、マスター』

それからイカロスとセシリアが空中戦を始め、他は地上で戦闘を
開始した。

数分後、アリーナに揺れを感じ地上で戦っていたメンバーは、いったん戦闘を中止しピットの方を見ると、一夏が落ち込んでやって来た。

話を聞くとどうやら凰さんに対して禁句を言ったみたいで、それに怒った凰さんはISを部分展開し壁を殴り、ピットから出て行ったことだった。

あれから数日後の試合当日。第二アリーナ第一試合の組み合わせは一夏対凰さん。

新人生同士の戦いとあって、アリーナには生徒で埋め尽くされている。

「なんでお前達はここにいるんだ？」

俺とイカロス、ニンフ、アストレアは織斑先生や山田先生達がいるところで、リアルタイムモニターを見てみると織斑先生に話しかけられたため、

「ここの方が見やすいと思ったからです」

と答える。それからは織斑先生もモニターの方に向く。

凰さんのISは『シエンロン甲龍』その特徴はアンロック・ユニセル非固定浮遊部位であり、おそ

らく形からすれば弾丸を打ち出すものだろう。

ブザーが鳴り響き、一夏と凰さんが同時に動きだした。

一夏は凰さんの初撃を防いだものの、凰さんの攻撃になんとかさばいている。しかし、凰さんの衝撃砲によって吹き飛ばされた。

その後、衝撃砲を回避し続け、イグニッション・ブースト瞬時加速を繰り出し、一気に間合いを詰め、《雪片型式》を発動して、あと一息のところで大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

ステージ中央から煙が上がり、謎のISがアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた際の衝撃波だった。

一夏と凰さんに向けて、ビームを連射している。二人はなんとかかわした。そこに

『織斑くん！ 凰さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！
すぐに先生たちがISで制圧に行きます！』

山田先生がプライベート・チャネルで話しかけていた。だが二人は謎のISに向かって飛び出した。

ところ変わって管制室では、

「もしもし！？ 織斑くん聞いてます！？ 凰さんも！ 聞いてますー！？」

山田先生、ISのプライベート・チャネルは声に出す必要はありませんよ。周囲から見ると危ない人に見えますよ。

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもらおう」

「お、お、織斑先生！ 何をのんきなことを言っているんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「……………あの、先生。それ塩ですけど……………」

「……………」

コーヒーに運んでいたスプーンを止め、塩を容器に戻した。

「なぜ塩があるんだ」

「さ、さあ……………？ でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど……………」

「……………」

「あつ！ やっぱり弟さんのことが心配なんですわね！？ だからそんなミス……………」

「……………」

イヤな沈黙が場を支配する。

「あ、あのですねっ・・・」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？ あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ・・・」

「どうぞ」

有無を言わず迫力に山田先生は、涙目でコーヒーを受け取った。

「い、いただきます・・・」

「熱いので一気に飲むといい」

織斑先生は悪魔だ、とそんなことを思っていると突然ドアが開き篠ノ之さんとセシリアが入って来た。

「先生！ わたくしにISの使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが、・・・これを見る」

ブック型端末を数回叩き、第二アリーナのステータスチェックを表示した。

「遮断シールドがレベル4に設定・・・？ しかも、扉がすべてロックされて・・・あのISの仕様ですの！？」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かうこともできないな」

「そつでもないですよ」

俺は二人の会話に口をはさんだ。

「何？ 出来るとでも言うのか？」

「はい、ニンフなら解除できますよ」

「ならば任せよう」

「ニンフ頼むぞ」

「はい、マスター」

ニンフはコンピュータに近づきハッキングを始めた。

あれ、篠ノ之さん。何処に行くのだろう。イカロスとアストレアに手招きして、篠ノ之さんの後を追う。

篠ノ之さんの向かった先は、中継室だった。俺達が来たときには、審判とナレーターがのびていた。

「一夏あつー！」

近くにいるため、耳がキーンとする。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとするー！」

「篠ノ之さん、危ないから下がって」

「ええい。離せ！」

「アストレア、篠ノ之さんを抑えてて」

「わかったわ」

アストレアが篠ノ之さんを抑えているが、篠ノ之さんが暴れているため抑えるのに手こずっているようだ。

謎のISを見ると腕を此方に向けているのが見えた。俺は、ヴァーチエを緊急展開して、イカロスに指示を出す。

「イカロス、『^{イジス}aeGIS』を窓の後ろに展開しろ。急げ」

「っ！ はい、マスター」

敵の射程上に入り、GNフィールドを展開、それと平行して圧縮粒子のチャージをする。

敵のビームが此方に向かって来るが、GNフィールドで防ぎ、圧縮粒子量が98%を超えたのを確認し、GNバズーカの銃口を謎のISに向ける。

「圧縮粒子開放。GNバズーカ、バーストモード」

敵のビームを押し返し、デユナメスに変更して、イカロスに中継室の防衛を任せ、一夏達のところへ飛び出した。

「お前ら、無事か？」

「ああ」

「なんとかね」

「ところで一夏、《零落白夜》をあと何回使える？」

「一回しか使えないぞ」

「一回か……俺と凰さんが援護するから、一夏は隙を突いて攻撃を決めろ」

「おう」

「わかった」

二人に指示を出し俺は、両脚のホルスターからGNビームピストルを取り出し、敵に向けて牽制で回避させ、敵の攻撃に合わせてGNミサイルを射出する。

「二人共、今だ！」

「鈴、やれ！」

「わ、わかったわよ！」

凰さんは両腕を下げ、肩を押し出すような格好で衝撃砲を構え、最大出力で行うため、補佐用の力場展開翼が後部に広がり、一夏がその射線上に飛び出す。

「ちょっと、ちょっと馬鹿！ 何してんのよ！？ どきなさいよ！」

「いいから撃てー！」

「ああもうつ．．．．．！ どうなっても知らないわよー！」

GNミサイルで敵の右足を破壊し、一夏が衝撃砲のエネルギーにより、『瞬時加速』で一気に距離を詰め、零落白夜を叩き込み敵I Sの右腕を切り落とした。

しかし、敵I Sの反撃で一夏が残った左拳を叩き込まれた。しかもそのままビームを至近距離で撃つみたいだ。

『一夏っー！』

篠ノ之さんと凰さんが叫んだ直後、

「．．．．．狙いは？」

『完璧ですわー！』

セシリアの声が聞こえ、ブルーティアーズのピットが四機同時狙撃によって敵I Sを撃ち抜いた。

『ギリギリのタイミングでしたわ』

『なに、セシリアならできると思っていたからな』

『当然ですわね！ 何せわたくしはセシリア・オルコット。イギ

リス代表候補生なのですから！」

一夏達は敵を倒したことで喜んでいるが、敵ISが再起動し、残った左腕を最大出力形態に変形させ、一夏を狙っているのに、当の本人達は気付いてない。

「くそっ………。仕方ない。TRANS-AM」

俺のGUNDAM共通のワン・オフ・アビリティー【TRANS-AM】を起動させる。

敵ISの射程上に飛び出し、GNビームピストルをホルスターに戻し、両肩にあるGNフルシールドを前方に展開。腰からGNビームサーベルを一本取り出す。それを足で蹴り、敵のビームが俺に直撃すると同時に、俺が蹴ったGNビームサーベルが敵ISに突き刺さるのが見えてから俺は気を失った。

「うっ………。ここは………?」

俺は、全身の痛みにより目が覚めた。周囲を見回すと、保健室のベットにいるようだ。

「気がついたか」

シャッターとカーテンの音がした方に顔を向ける。

「体に致命的な損傷はないが、全身に軽い打撲はある。数日は地獄だろうが、まあ慣れる」

「はぁ……………」

うーん、最後の衝撃が影響したんだろう。

「ところでお前のISは、一体なんだ。織斑と戦った時と姿が違ったが」

「すみません。今はまだ言えません」

「そうか……………。私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻っていいぞ」

それだけ言い残すと、織斑先生は保健室を出て行った。

「よう航」

織斑先生と入れ違いに一夏達が入ってきたみたいだ。

「身体の調子はどうだ？」

「少し全身が痛むだけだな」

「そ、その助けてくれて、あ、ありがとう」

「あたしもあんたが来てくれて助かった」

「いや、気にしないでいいよ。それと二人共、俺のことは『航』」

でいい」

「私のことは『篝』と呼べ」

「あたしのことも『鈴』でいいわ」

「これから宜しく。篝、鈴」

「それじゃあ俺達は戻るな」

「ああ、また明日」

そう言い、三人は保健室から出て行った。

学園の地下深く、そこはレベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間である。

機能停止したISはすぐに運び込まれ、解析が開始された。それから二時間、千冬は何度もアリーナでの戦闘映像を繰り返し見ている。

「織斑先生？」

ディスプレイに割り込みでウィンドウが開く。ドアのカメラから送られてきたそれには、ブック型端末を持った真耶が映った。

「どっぞ」

許可をもらいドアが開くと、真耶は入室した。

「あのISの解析結果が出ましたよ」

「ああ。どうだった？」

「はい。あれは - - 無人機です」

世界中でISの開発が進むなか、まだ完成していない技術。遠隔操作と独立稼働。その技術が謎のISに搭載されていた。その事実
は、すぐに学園関係者全員に箝口令が敷かれた。

「どのような方法で動いていたかは不明です。山下さんの最後の
攻撃で機能中枢が貫通していました。修復も、おそらく無理かと」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか」

やはりな、と続けどこか確信じみた発言をする千冬に、真耶は怪訝
訝そうな顔をした。

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今はまだ - - な」

そう言っつて千冬はまたディスプレイの映像に視線を戻す。その顔は戦士の顔に近かった。

かつて世界最高位の座にあった、伝説の操縦者の時を思わせる鋭い瞳は、ただ映像を見つめ続けていた。

「マスター！」

部屋に戻るとイカロス達が近寄ってきた。

「身体はもういいの？」

ニンフが心配そうに聞いてくる。

「心配を掛けて悪かった。もう大丈夫だ」

と言い、ニンフの頭を撫でる。すると顔を背けるが、どこか嬉しそうだ。

それからイカロスが用意してくれた夕食を食べ、息抜きに廊下に出ると山田先生が一夏と箒の部屋の前に居た。暫く様子を見ると、山田先生が中に入り数十分後、箒を連れて出てきた。どうやら、箒が引っ越しをしたみたいだ。

部屋に戻り、後は寝るだけになった頃突然、

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……。。わ、私が優勝したら……っ、付き合ってもらおう！」

と聞こえたが、箒も大胆な宣言をするなあとおもいながらベットに横になり、眠りについた。

第六話 フランスとドイツからの転校生

六月の頭、月曜日。今日もいつものように一夏と登校し、教室に入ると、

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑君と山下君の話よ」

「いい話？ 悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？ 絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？ 女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで・・・」

「俺達がなんだって？」

「あ・・・っ！ 織斑君達だ！」

「えっ、うそ！？」

「ねえねえ、あの噂ってほんと・・・もがっ！」

俺達の存在に気付いた女子が詰め寄ってくる。噂って、謎のISが襲撃して来た日のことかな？

「い、いや、なんでもないの。なんでもないのよ。あははは・・・」

「・・・バカ！ 秘密って言ったでしょうが！」

「いや、でも本人だし・・・」

一人が俺達の前で通せんぼし、その陰で二人が小声で話している。

「噂って？」

「う、うん！？ なんのことかな!？」

「ひ、人の噂も三六五日って言うよね？」

「な、何言ってるのよ!!!は！ 四十九日だってば!！」

何かを隠しているような気がする。

「何か隠してない？」

「そんなことっ」

「あるわけっ」

「ないよ!？」

無駄に連携技を決めて即撤退。さすがに一夏も状況が全く理解出来ないうつだ。

噂の件から数分後、

「やっぱりハヅキ社製のがいいなあ」

「え？ そう？ ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの!」

「私は性能的に見てミユウレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

クラス中の女子がISスーツのカタログを持って、意見を交換している。

「そういえば織斑君達のISスーツってどこのやつなの？ 見たことない型だけど」

「あー。特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしいよ。えーと、もとはイングリッド社のストレートアームモデルって聞いている」

「よく覚えていたな、一夏」

俺もあまり必要性がないから忘れかけてた。ちなみに俺のISSスーツは全身タイプだ。お腹の部分だけ晒すのは何か嫌だったし。

「ISSスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISSはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができます。あ、衝撃は消えませんがあしからず」

長い説明お疲れ様です、山田先生。

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。……って、や、山ちゃん？」

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのスーツの申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。……って、や、山ぴー？」

入学から二ヶ月。山田先生には8つくらい愛称がついていた。俺にも山田先生と同じあだ名がついてたりする。

「あー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃんいいじゃん」

「まーやんはまじめっ子だなあ」

「ま、まーやんって……」

「あれ？ マヤマヤの方が良かった？ マヤマヤ」

「そ、それもちょっと……」

「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」

「あ、あれはやめてください！」

珍しく語尾を強くして山田先生が拒絶の意志を示す。何かトラウマでもあるのだろうか。

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりましたか？ わかりましたね？」

はいとクラス中から返事をしているが、あまり効果がなさそうだ。俺と山田先生のおだ名が増えそうだ。

「諸君、おはよう」

『お、おはようございます！』

ざわざわとしていた教室が織斑先生の登場で静かになった。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないうちに。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それ

もないものは、まあ下着で構わんだろう」

いや構うだろう！ と俺と一夏以外も心の中で突っ込んだと思う。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

織斑先生に話し掛けられ、山田先生が慌てて返事をした。

「えええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも二名です！」

「え・・・・・・・・・・」

『えええええっ!?!?』

いきなりの転校生紹介にクラス中がいきいきにざわついた。

「失礼します」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クラスに入って来た二人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。転校生の二人のうち、一人が――男だった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

クラス全員が呆気にとられた。

「お、男…….?」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を……」

第一印象は、『貴公子』といった感じだ。

「きちゃ…….」

「はい?」

『きちゃあああああ…….っ!』

何だっ!? 咄嗟に耳を塞いだにも係わらず、貫通するとは。

「男子! 三人目の男子!」

「しかもうちのクラス!」

「美形! 守ってあげたくなる系の!」

「地球に生まれて良かった~~~~!」

相変わらず元気だなあ、うちのクラスは。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

教師の仕事、面倒くさそうだな。俺はやりたくないな。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

忘れていたわけではないが、デュノアの印象が強すぎた。だが、それでも一人異様な雰囲気纏っている。

「……………」

当の本人は口を開かず、視線を織斑先生に向けている。

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

佇まいを直して素直に返事をした銀髪の転校生に、クラス一同がぼかんとする。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答え、姿勢を正すがどう見ても軍人、それか軍施設関係者というのわかる。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クラスメイトたちの沈黙。続く言葉を待っているのだが、名前を口にしたらまた黙ってしまった。

「あ、あの、以上・・・・・・・・ですか？」

「以上だ」

空気にいたたまれなくなった山田先生が出来る限りの笑顔でボーデヴィツヒさんに訊くが、無慈悲な即答が返ってきた。

あ、一夏とボーデヴィツヒさんの目が合って、一夏の方に向かっている。

「！ 貴様が・・・」

ボーデヴィツヒさんが手を振りかぶった瞬間、殺気を一瞬だけ全開にし、GNスナイパーライフルを展開、そのまま振り上げて一夏が殴られるのを阻止する。

（この殺気、教官以上だと。こいつは何者なんだ。）

「貴様、邪魔をする気か？」

「別に。今問題を起こして困るのは、お前の方だぞ」

「くっ・・・・・・・・まあい。私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

屈辱的な表情で俺を睨み、一夏に一言伝えてから立ち去っていき、空いている席に座り微動だにしなくなった。

「あー……ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

織斑先生がぱんぱんと手を叩いて行動を促した。

「おい織斑と山下。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

「君達が織斑君と山下君？ 初めまして。僕は……」

「挨拶は後だ。一夏、さっさと行くぞ」

「おう」

即座に行動に移し、俺はデュノアの手を取り教室を出た。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

さっきまでと違つがまあいいや。

「ああっ！ 転校生発見！」

「しかも織斑君と山下君と一緒に！」

ちっ、情報先取のために尖兵を送り出したか。

「いたっ！ こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

何？ 増援だと。それよりもいつからここは武家屋敷になったんだ。

「織斑君達の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きやああっ！ 見て見て！ 二人！ 手！ 手繋いでる！」

「日本に生まれて良かった！ ありがとうお母さん！ 今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

おい、最後の奴。なんて物をあげてるんだ。

「な、なに？ 何でみんな騒いでるの？」

「そりゃ男子が俺達だけだからだろ」

「………？」

「いや、普通に珍しいだろ。ISを操縦できる男って、今のところ俺達しかいないんだろ？」

「あつ！　．．ああ、うん。そうだね」

何か怪しいなあ。

「それとアレだ。この学園の女子って男子と極端に接触が少ないから、ウーパールーパー状態なんだよ」

「ウー．．．．．何？」

「気にしなくていいよ。わかりづらいし」

「しかしまあ助かったよ」

「何が？」

「いや、やっぱり学園に男二人はつらいからな。もう一人男がいてくれるっていうのは心強いもんだ」

「そうなの？」

そうなのって．．．．．この学園で男がいる喜びがわからないなんて、デュノアは本当に男なのか？

いろいろ考えているうちに群衆を抜け、校舎を出ていた。

「よーし、到着！」

「とりあえず自己紹介をしようか。俺は山下航。呼び方は航で」

「俺は一夏。一夏って呼んでくれ」

「うん。よろしく一夏、航。僕のことシャルルでいいよ」

「ああ」

「わかった、シャルル。………ってうわ！ 時間ヤバイな！
すぐに着替えちまおうぜ」

一夏がそう言いながら制服のボタンを一気に外し、ベンチに投げ
てTシャツも脱ぎ捨てていた。俺は中にESスーツを着込んでいる
ので、脱ぐペースはあまり早くない。

「わあっ!?!」

『?』

突然驚いてどうしたんだ？

「荷物でも忘れたのか？ って、なんで着替えないんだ？ 早く
着替えないと遅れるぞ。シャルルは知らないかもしれないが、うち
の担任はそりゃあ時間にするさい人で……」

「う、うんっ？ き、着替えるよ？ でも、あの、あっち向いて
て………ね？」

「??? いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが……
……って、シャルルはジロジロ見てるな」

「み、見てない！ 別に見てないよ!?!」

シャルルが両手を突き出し、慌てて顔を床に向ける。もしかして訳アリか？

「まあ、本当に急げよ。初日から遅刻とかシャレにならない……というか、あの人はシャレにしてくれんぞ」

「おい一夏、さっさと着替える。時間ないぞ」

「うわ、二人共着替えるの超早いな。なんかコツでもあんのか？」

「い、いや、別に……って一夏まだ着てないの？」

「これ、着るときに裸ってというのがなんか着づらいんだよなあ。引つかかって」

「ひ、引つかかって？」

「おっ」

「下ネタ発言してんじゃねえ！」

「ぶべらっ」

一夏に制裁を下す。さらに背負い投げの要領で投げ飛ばす。

「いいの、アレは？」

「いいんだ。下ネタ発言をした、当然の報いだ。それより遅刻したくないから、早く行こうぜ？」

「う、うん」

シャルルが戸惑いながらも、俺の後をついて来る。

「ふう。なんとか間に合ったな」

あと少しで遅刻するところだった。

「ずいぶんゆっくりでしたわね」

「悪い。シャルル目当てで他のクラスの女子が集まっていたから、遅くなっただ」

「そうでしたの」

数秒後、

「遅い！」

一夏が遅れてやって来た。

「遅かったな」

「お前が投げなかったら、間に合ったのに」

俺に対して一夏が嫌味を言ってきた。

「なに？ アンタまたなんかやったの？」

後ろから鈴が話しに加わったが、一夏は辺りをキョロキョロして

いる。

「後ろにいるわよ、バカ」

一夏が後ろを向いてようやく気付いた。

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれかけましたの。航さんが阻止しなければ、はたかれましてたわ」

「はあ！？ 一夏、アンタなんでそうバカなの！？」

「・・・安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる」

セシリアと鈴がゆっくり首を動かし、視線の先には織斑先生が待ち構えていた。そんな二人に出席簿が頭に落ちた。

第七話 相部屋になるための模擬戦

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

『はいっ！』

一組と二組の合同実習なので人数はいつもの倍。出てくる返事も妙に気合いが入っている。

「くうっ……………。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……………」

「……………一夏のせい一夏のせい……………」

ズキズキと叩かれた場所が痛むのか、セシリアと鈴はちょっと涙目になりながら頭を押さえているが、鈴は不吉なことを呟いていた。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。――凰！ オルコット！」

「な、なぜわたくしまで!？」

セシリアがとばっちりを喰らったようだ。

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前に出ろ」

「だからってどうしてわたくしが……………」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

「お前ら少しはやる気を出せ。――気になる奴にいいところを見せられるぞ?」

なんか今、都合のいい餌にされたような気がした。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ、実力を違いを見せるいい機会よね! 専用機持ちの!」
いきなり二人共やる気を示しだした。やっぱり原因は織斑先生か。

「それで、相手はどちらに? わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は……」

突然空気を裂く音が聞こえ、上を見ると……

「あああーっ! ど、どいてくださいっ!」

と、言いながら男子が固まっているところに向かって来た。

俺はデュナメスを起動させ、咄嗟にシャルルの腕を掴んで避難した。

「シャルル、無事か？」

「うん、ありがとう。航」

音がした方を見ると、一夏が山田先生を押し倒していた。あの時の罰では足りなかったか。ならば、

「狙い撃つ！」

GNスナイパーライフルを一夏の頭の方に向け、ビームを撃つ。一夏は身の危険を感じたのか山田先生から体を離して俺の方を向いた。

「ちっ！ 外したか、このラッキースケベめ」

俺はさらに狙いを定める。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

反対側から鈴が《双天牙月》を連結させた音が聞こえた。そのまま振りかぶって投げた。

「うおおおっ!？」

鈴が一夏の首を狙って投げたが、一夏は間一髪のけぞってかわしたのに勢い余って仰向けに倒れた。

投げた《双天牙月》はブーメランと同じで返って、再び一夏に向かった。

「はっ！」

ドンツドンツ！ と弾丸は的確に《双天牙月》の両端に当たり、軌道を変えた。

「俺はさらに、狙い撃つ！」

威力を最低限にして《双天牙月》の両端を叩き、軌道を少し戻した。どうやら山田先生は、今からでは間に合わないと判断したのか何もせず、ただ見ていた。《双天牙月》は鈴の手元に戻った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺以外の生徒は啞然としていた。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今みたいな射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし・・・・・・・・」

「

体を回して起き上がり、肩部武装コンテナに銃を預け、ずれた眼鏡を両手で直した。

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？ あの、二対一で・・・・・・・・？」

「いや、さすがにそれは・・・・・・・・」

「ふむ。二対一が嫌なら……。織斑と山下も参加しろ。織斑、オルコット、凰対山下、山田先生で行う。準備が出来次第、開始する」

俺はデュナメスからエクシアに変更する。

「織斑と山下。どちらか勝った方が、デュノアと相部屋にする。では、はじめ！」

号令と同時にセシリアと鈴、一夏が飛翔した。それを目で確認してから、俺と山田先生も空中へと躍り出る。

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

「航、さっきはよくもやってくれたな」

「ふん、返り討ちにしてやる」

「い、行きます！」

セシリアが先制攻撃を仕掛けて来たが俺と山田先生は難なく回避する。

「山田先生、セシリアの相手を頼みます」

「はい、でも二人を相手に戦えるんですか？」

「ええ。問題ないです」

山田先生にそう言って、鈴の方に向かって右肩にあるGNビームサーベルを抜き振り下ろす。

「くっ………。片手じゃ受け止めれないなんて」

双天牙月二本で受け止める鈴。俺はすぐにその場から離脱し、一夏にGNソードで攻撃。

「はあああっ！」

予想通り雪片式型で防いできた。俺は左手にあるGNビームサーベルで斬りつけ離脱。一夏が少し飛ばされていたところを見ると、鈴の衝撃砲を喰らったみたいだ。

GNソードをライフルモードにして、一夏に向けて撃ちながら、再び鈴に接近している途中でGNビームサーベルを戻し、腰の後ろにあるGNビームダガーに持ち直す。そのまま龍砲に突き刺して反対側も同じようにして龍砲を使えなくする。

「ちよっと！　なんてことしてくれたのよ」

「知るか。勝負で手段を選んでたまるか」

さて、周りを見るとセシリアはもうボロボロだった。それに対して山田先生はあまり被弾してないようだ。

「そろそろ終わらせる。TRANS-AM」

TRANS-AMを起動させ、GNソードをソードモードに変更

後、鈴の周りで斬りつけ、セシリアのいるところに向けて蹴り飛ばす。セシリアと鈴がぶつかったところで、山田先生がグレネードを投擲。爆発が起こり、二人は地面に落下した。

「さて、残ったのは一夏だけだ。やられる覚悟は出来ているな？」

「ちょっと、もう俺だけかよ。こうなったら、航に一撃でも入れてやる!」

そう言つて一夏が俺に突っ込んで来るが、俺は回避して反応出来ない速度で斬り、急上昇から急下降に移り、その勢いで踵落としを決めて一夏も地面に落下した。

「くっ、うっ……。まさかわたくしが……」

「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！ 無駄にはかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ!」

「こっちの台詞よ！ なんですぐにビットを出すのよ！ しかもエネルギー切れるの早いし!」

「ぐぐぐぐぐ……!」

「おおおお……!」

「くそっ。やはりまだまだだったか」

一夏は最初の頃よりだいぶ上達したが、型が完璧になってないな。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

織斑先生が手を叩いてみんなの意識を切り替える。

「専用機持ちは織斑、山下、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。では七人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれる」

織斑先生が言い終わると、俺と一夏、シャルルに大勢の女子が詰め寄って来た。

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「わかんないところ教えて」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？ 同じグループに入れて！」

この状況を見かねたのか、

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！ 順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

鶴の一声でアリのように群がっていた女子達は、蜘蛛の子を散らすのごとく移動した。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

織斑先生。溜息を吐いてる場合じゃないと思います。

「……………やったあ。織斑君と同じ班つ。名字のおかげねっ……………」

「……………山下君のIS教えて……………」

「……………うー、セシリアか……………。さっきボロ負けしてたし。はあ……………」

「……………鳳さん、よろしくね。あとで織斑君のお話聞かせてよっ……………」

「……………デュノア君！ わからないことがあったら何でも聞いてね！ ちなみに私はフリーだよ！……………」

「…………………………」

唯一会話がなないのがボーデヴィツヒさんの班である。あの様子じやあ、話掛けるな、と言ってるみたいなものだ。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄』が三機、『リヴァイヴ』が三機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

山田先生がいつもよりしっかりしている。さっきの模擬戦で自信を取り戻したのだろうか。その姿はなんだか堂々としている。

「山下君、ISの操縦教えてっ」

「実戦訓練の基本はツーマンセルよね。じゃあ山下君、組みましよう」

「ねえねえ専用機ってやっぱりいい感じ？ いいなー、うらやましいなー」

「静かに。皆は『打鉄』と『リヴァイヴ』どっちがいい？」

『リヴァイヴがいい』

まさかの全員一致だった。山田先生のところまで行って、リヴァイヴを受け取って戻る。グループに戻ると、

『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切ってます。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね』

ISのオープン・チャンネルで山田先生が連絡してくる。

「それじゃあ出席番号順にISの装着と起動、そのあと歩行までする」

「よろしくお願いしますっ！」

「ああっ、ずるい！」

「私も！」

「第一印象から決めてました！」

俺の班の女子が一行に並び、お辞儀をして頭を下げたまま右手を突き出してくる。

『お願いしますっ！』

一夏とシャルルのところからも同じような声が聞こえた。その後、

スパーン！

『いったああっ！』

見事なハモリ悲鳴だ。頭を押さえながら顔を上げたシャルル班の女子は、目の前にいる人物に気付いた。

「やる気があってなによりだ。それならば私が直接見てやるっ。最初は誰だ？」

「あ、いえ、その……………」

「わ、私達はデュノア君でいいかな……………なんて」

「せ、先生のお手を煩わせるわけには……………」

「なに、遠慮するな。将来有望なやつらには相応のレベルの訓練が必要だろう……………ああ、出席番号順ではじめるか」

小さく息をのむのが聞こえた気がした。

「さて、皆もシャルル班のようになりたくなかったら、真面目にしようか？」

『はいっ！』

女子達は、シャルル班のようま事になりたくないのか、素直に返事をする。

「とりあえず装着して起動、歩行を順にし、降りる時は必ずしゃがむこと。行動は迅速に行わないと、放課後居残りになるから忘れずに」

「そ、それはまずいわね！ よし、真面目にやろう！」

今まで真面目にしてなかったような発言だな。

「あ、言い忘れてたけど、高い位置で降りたら原因を作った人が土台になってもらうから。それが嫌なら指示した通り、降りる時は必ずしゃがむように」

『はいっ』

その後特に何も問題は起こらず、滞りなく終了した。

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

織斑先生が連絡事項を伝えると山田先生と一緒に引き上げて行った。

「あー……………あんなに重いとは……………」

「ISを展開したら楽だったのに……………」

「仕方なかったんだよ。時間いっぱいだったから」

一夏班は二人目から抱っこして運んでいたため、時間がギリギリだった。

シャルル班は体育会系女子が訓練機を運んでいた。なんでも『デユノア君にそんなことさせられない!』とか言ってた。

「まあ、いいや。シャルル、着替えに行こうぜ。俺達はまたアリのナの更衣室まで行かないといけないしよ」

「え、ええつと……………僕はちよつと機体の微調整をしていくから、先に行つて着替えててよ。時間がかかるかもしれないから、待つてなくていいからね」

「ん？ いや、別に待つてても平気だぞ？ 俺は待つのに慣れ

……」

「さっさと行きやがれこの変態め。そんなに男の裸が見たいのか

「？」

「そんなわけあるか！ 解ったよ、先に戻ってるよ」

そう言っアアリーナの更衣室に戻って行く一夏。

「航も先に行っアアリーナだよ？」

「悪いシャルル。俺の場合は本当に機体を整備しないとあとが大変になるから。それじゃあ、またあとで」

(皆の前ではエクシアとデユナメスしか見せてないからなあ。キユリオスは一度も使っアないからいいとして、ヴァーチエは見つかりたくないんだよねえ。面倒なことになりそうだし。はぁー鬱になりそうだ)

と、思いながらアリーナをあとにする。

「……………どういっアとだ」

「ん？」

昼休み、俺達は屋上にいた。いや、俺とシャルルは一夏に連行された。

「天気がいいから屋上で食べるっア話だっアただろ？」

「そうではなくてだな……………」

篤が俺達に視線を向けてくる。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ」

「そ、それはそうだが……………」

そんなやりとりを聞きながら、弁当の包みを開ける。

「はい一夏。アンタの分」

そう言っで一夏にタッパーを放る鈴。

「おお、酢豚だ！」

「そ。今朝作ったのよ。アンタ前に食べたと言ってたでしょ」

俺とシャルルは食事を始めている。イカロスが作った料理もなかなかだ。

「航さん、わたくしも今朝はたまたま早く目が覚めまして、こういうものを用意してみました。よろしければおひとつどうぞ」

そう言われてサンドイッチを一つ手に取り、千切って口に入れる。

「セシリア……………きちんと味見したか？」

「いえ、していませんわ」

そうか味見をせずに食わしたか。俺やイカロスでさえも味見は必ずするのに。

「サンドイツチを食べた感想はお前も食べればわかるぞ」

俺は残ったサンドイツチをセシリアの口に押し込んだ。するとセシリアの顔が真っ青になってその場に倒れた。

「大丈夫かな？」

「大丈夫だろ。実際に俺も食べたし。味は酷かったけど」

「そうなんだ……」

心配をする要素は一つもないと思う。

「男同士仲良くしようぜ。色々不便もあるだろうが、まあ協力してやっていこう。わからないことがあったらなんでも聞いてくれ。」

――ISS以外で」

「アンタはもうちょっと勉強しなさいよ」

「してるって。多すぎるんだよ、覚えることが。お前らは入学前から予習してるからわかるだけだろ」

「ええまあ、適正検査を受けた時期にもよりますが、遅くてもみんなジュニアスクールのうちに専門の学習を始めますわね」

いつの間にかセシリアが復活していた。

「一夏が必読の参考書を捨てたからだろ。俺の場合は入学する前日に貰ったんだから普通に取組んだら、確実に間に合わないんだよ。結局翌日はさっぱりわからなかったし」

「くっ、痛いところをつきやがって」

そんな中俺とシャルルの昼食は半分も食べ終わっていた。

昼食は一夏が箸に食べさせたらセシリアと鈴が自分も、と俺や一夏に迫って来たり、俺の弁当のおかずを食べたセシリアが落ち込んだのを見て、箸と鈴も俺のおかずを食べて、セシリアと同じ様になっっていた。

第八話 貴公子の正体と暴虐

「じゃあ、改めてよろしく、シャルル」

「うん。よろしく、航。ところで彼女達は誰？」

夕食を終えたシャルルが部屋に戻ってきた。

「彼女達は俺の家族だ。おとなしそうなのがイカロス。羽が透明なのがニンフ。活発なのがアストレア。問題さえ起こさなければ、基本的に自由にさせているから気にしないで」

「うん、わかった」

今は食後の休憩をかねてイカロスが入れてくれた麦茶を飲んでいく。

「紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「気に入ってもらえたようで何よりだ。話は変わるけど、シャルル— なんだけど順番はどうする？」

「あ、僕が最後でいいよ。航達が先に使って」

「そうか。だが、遠慮とかしなくていいからな」

「うん。ありがとう。……そういえば一夏はいつも放課後にISの特訓しているって聞いたけど、そうなの？」

「ああ、一夏は他の皆より遅れているから、地道に訓練時間の質

と量を重ねるしかないからな」

今日はシャルルの引越しがあつたので、放課後の特訓は俺と二
ンフだけ休みにした。イカロス達には、徹底的に行つていいと伝え
ているので、今頃は疲れて眠っているだろう。

「僕も加わつていいかな？ 何かお礼がしたいし、専用機もある
から少しくらいは役に立てると思うんだ」

「それはありがたい話だ。ぜひ頼む」

「うん。任せて」

こうして一夏を鍛える？ メンバーが新たに加わつた。

シャルルが転校してきてから五日後の土曜日。IS学園では土曜
日の午前は理論学習、午後は完全に自由時間になっており、アリー
ナが全開放されているため、ほとんどの生徒が実習に使っている。

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単
純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「どうせわかつたつもりでいたから勝てないんだよ」

「うっ、そうだよ。わかつたつもりだったよ」

「うーん、知識として知っているだけって感じかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「うっ……、確かに。『瞬時加速』も読まれてたしな……」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「直線的か……うーん」

「一夏、瞬時加速中に軌道を変えようと思うなよ。最悪骨折するからね」

「……なるほど」

シャルルの説明はわかりやすいから、一夏が話のたびにうなずいている。篝、鈴、セシリアの説明によると、

『ごう、図ばーつとやってから、がきんっ！ どかんっ！ っていう感じだ』

『なんとなくわかるでしょ？ 感覚よ感覚。……はあ？
なんでわかんないのよバカ』

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

これを聞いたとき、俺でもさっぱりだった。

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だというのかしら」

「お前等はあとで特訓^{フルボツ}な。逃げるなよ」

死刑宣告でも受けたのか、一夏の特訓が終わるまで筈、セシリア、鈴の顔は真っ青になっていた。

「ところで一夏の『白式』って後付武装がないんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」

「原因はワンオフ・アビリティーにあるんじゃないのか？」

「ワンオフ・アビリティーっていうと……えーと、なんだっけ？」

「言葉通り、唯一仕様の特殊才能だよ。各ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する能力のこと」

「まあ、普通は第二形態から発現するのだが、それはごく少数しかない。俺と一夏のISが特殊なんだよ」

「ふーん。……って、航のISのも唯一仕様あったのか」

「五日前の模擬戦の終盤で俺のISが赤くなっただろ？」

「そう言われて見れば……」

あまり覚えてなかったか。

「あれが俺の唯一仕様の『TRANS-AM』で、一夏の『零落
白夜』とは別の意味で諸刃の剣だ」

「なんで航の唯一仕様が諸刃の剣なの？」

「それは機体性能を通常の3倍以上に引き上げるのだが、限界時
間を超えるとしばらく性能が大幅に下がるからだ」

「そうなんだ。じゃあそろそろ、射撃武器の練習を試みようか。
はい、これ」

そう言ってシャルルが一夏に《ヴェント》を渡した。

「え？ 他のやつは装備って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許可すれば、登録してある人全員
が使えるんだよ。……うん、今一夏と白式に使用許可を発行したか
ら、試しに撃ってみて」

「お、おう。じゃあ、行くぞ」

「うん。とりあえず撃つだけでもだいぶ違うと思うから」

一夏が一度深呼吸をして、引き金を引いた。

「どっつ？」

「お、おう。なんか、アレだな。とりあえず『速い』っていう感想だ」

「そりゃそうだろ。弾丸が小さい分、より速いんだから。じゃあ、次はコレね」

そう言っで一夏にGNスナイパーライフルを渡す。

「コレは？」

「俺が使っているビーム兵器だ。実弾兵器よりも反動は全くないから。早速撃ってみて」

一夏を促し、引き金を引かせた。

「うわっ、全然反動がなくて、撃った感じがしないな。それに実弾よりも速いし」

「これで射撃武器の特徴が解つただろう？ 軌道予測さえわかれば簡単に命中させれるし、外れても牽制になるんだ」

「だから、簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか……」

「うん」

俺とシャルルがわかりやすく説明したので、一夏は理解も納得もできたのであろう。

一夏から武器を返してもらおうと、

「ねえ、ちょっとアレ……………」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階って聞いてたけど……………」

「……………」

視線を移すとそこには、ボーデヴィツヒさんがいた。

「おい」

「……………なんだよ」

一夏が嫌々返事をするなか、言葉が続けながらボーデヴィツヒさんが飛翔してきた。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

イカロスに頼んで調べてもらったところ、少なからず因縁があるみたいだ。

第二回IS世界大会『モンド・グロツソ』の決勝戦の日。一夏が何者かに誘拐され、情報提供したのがドイツ軍であり、情報を提供した見返りにドイツ軍IS部隊で教官をしていた。

おそらく当時の教え子で経歴に傷を付けた一夏が憎いのであろうか。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえたであろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない」

織斑先生ならチームメイトが襲われても、助けに向かったと思うが、これは流石に言いすぎだろう。

「また今度な」

「ふん。ならば――戦わざるを得ないようにしてやる！」

漆黒のISを戦闘状態へシフトさせたボーデヴィツヒさんは、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

「イカロス、アストレア」

『はい、マスター』

俺はGNスナイパーライフルでビームを放って実弾を撃ち落とす。イカロスとアストレアは俺が行うことを意図したのか、一夏の側にアストレアが付き、イカロスは超々高熱体圧縮対艦砲ハイストスを構えている。

「チエックメイト」

いつの間にかシャルルも武器を展開してボーデヴィツヒさんに向けていた。

「くっ………」

対するボーデヴィツヒさんは周囲を囲まれており、行動を起こせないでいた。

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

突然アリーナにスピーカーからの声が響いた。

「……………ふん。今日のところは引こう」

横やりを二度も入れられて興が削がれたのか、ボーデヴィツヒさんは戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去って行った。

「一夏、無事か？」

「あ、ああ。助かった」

「邪魔が入ったから一夏の特訓はもういいとして、その三人。覚悟はいいな！」

『は、はいつ！』

篝、セシリア、鈴が返事をする。

特訓と言う名の処刑が行われ、アリーナから悲鳴が聞こえたとか聞こえてないとか、真相は同じアリーナに居た者にしか知らない。

「はぁー、疲れたー」

一対三の特訓を終え、自分の部屋に戻ってきた。

「ただいまー。つて、あれ？ シャルルは？」

「おかえりなさい、マスター。シャルルさんはシャワーを浴びています」

出迎えてくれたのはイカロスだった。シャルルはシャワー中か。

「イカロス。悪いけどクローゼットからボディーソープを出して、脱衣所に届けてくれないか？」

「わかりました」

俺がお願いした通りにイカロスが動いてくれるため、ありがたいと思う。

「あっ」

「………?」

洗面所からシャルルの声が聞こえたが、何かあってもイカロスがその場に居るから大抵のことが起きて大丈夫だろう。

「マスター。シャルルさんは女性でした」

「そうか……」

シャルルが女か。これで確信した。

「あ、上がったよ……」

「ん？ ああ」

イカロスにバレて、シャルルはコルセットをしてなかった。

「なぜ男のフリをしていたのか大体検討がついている」

「そう……なんだ……」

イカロスとニンフが暇なときにデュノア家について調べてもらっているので、事情を知っている。

「大方デュノア社が経営危機に陥り、注目を浴びるための広告塔と俺と一夏の機体のデータを盗んでこい、とでも言われたんだろう」

「すごいね。そこまでわかっているんだ」

「イカロスとニンフの手に掛ければこのくらい簡単にわかるさ」

俺達についても話すべきかな？

「航にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デユノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「少し俺達について話てやる」

「え？」

そりゃ突然言われたら驚くか。

「俺達はこの世界の住人ではない。そのためこの世界に俺の血縁者はいないということになる」

「その……ゴメン」

「シャルルが気にすることじゃないさ。イカロス達が居てくれて助かってるし。それより、シャルルはこれからどうするんだ？」

「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府もこの真相を知ったら黙ってないだろうし、僕は代表候補生を降るされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「それでいいのか？」

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方ないよ」

そう言っつて見せたシャルルの微笑みは、痛々しいものであり、絶望さえ通り越した諦観がそこにはあった。

「その心配はない」

「え？」

「特記事項第二一により、最低三年間は安全だ」

「航。よく覚えられたね。特記事項つて五十五個もあるのに」

「イカロスが分かりやすく教えてくれたからな」

「そうなんだ」

「これからのことを決めるのはシャルルなんだから、考えてみてくれ」

「うん。そうするよ」

元気になつて何よりだ。

「今から夕飯を作るけど何がいい？」

「うーん。すぐに思いつかないからなんでもいいよ」

なんでもいいか。

「イカロス、手伝ってくれ」

「何をすればよろしいでしょうか？」

「とりあえずパスタを五人前、茹でてくれ。固さはアルデンテで」

「了解しました」

鍋に水を入れて沸騰するのを待っている。

「沸騰するまで卵のソースを作ってた」

イカロスにそこまで指示を出す。俺はベーコンを小さく切り、温泉卵を作る。

それから三十分後、無事に料理が完成した。シャルルの口にあっただよんで数分後には食べ終わっていた。

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、ウソついてないでしょうね!？」

月曜の朝、教室に向かっていた俺達は廊下にまで聞こえる声に目をしばたかせた。

「なんだ？」

「さあ？」

「噂話でもしているんじゃないか？」

隣にいるのは一夏と男装しているシャルルだ。

「本当だつてば！ この噂、学園中で持ちきりなのよ？ 月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君か山下君と交際でき・・・」

「俺らがどうしたつて？」

『きゃああつ！？』

一夏がクラスに入って普通に声をかけたら、悲鳴が返ってきた。

「で、何の話だったんだ？ 俺らの名前が出ていたみたいだけど」

「う、うん？ そうだっけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

「ふーん。じゃありピートしてあげようか？」

『結構です！』

からかったら大きな声で返された。

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですね！ わたくしも自分の席につきませんと」

どこかしらよそよそしい様子で二人はその場を離れていく。その流れに乗ってなのか、何人が集まっていた他の女子達も同じように自分のクラス・席へと戻っていった。

「……………なんなんだ？」

「さあ……………」

「知らん」

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと……」

「第三アリーナだ」

『わあっ！？』

廊下で一夏とシャルル、エンジェロイドの三人、計六人で歩いてきたのだが、筈が突然声を掛けたので俺とイカロス以外が揃って声を上げた。

「……………そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりのことでびっくりしちゃって」

「あ、いや、別に責めているわけではないが……」

折り目正しく頭を下げるシャルルに、さすがの箒も氣勢を削がれたようだ。

「ともかく、だ。第三アリーナへと向かうぞ。今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦も出来るだろう」

俺達がアリーナに向かっていると、そこに近づくにつれてなにやら慌ただしい雰囲気伝わってくる。さっきから廊下を走っている生徒も多い。どうやら騒ぎは第三アリーナで起こっているようだ。

「なんだ？」

「何かあったのかな？ こっちで先に様子を見ていく？」

「悪いが俺達は直接向かわせてもらう」

一夏とシャルル、箒と別れてイカロス達に翼を広げさせ、二人の手に掴まり引っ張ってもらう。

アリーナに着いたときには、セシリアと鈴のISがかなり傷ついていた。対するボーデヴィツヒさんのISはかなり軽微な損傷だった。

「イカロス、鈴とセシリアに絶対防御圏^{イーシス}を展開しろ。アストレア

は一撃離脱だ」

『はい、マスター』

(GUNDAM起動、モードヴァーチエ)

両肩にあるGNキャノンで牽制し、鈴とセシリアからボーデヴィツヒさんを引き離れた直後、イカロスが二人に絶対防御圏を発動した。

「ええい。鬱陶しい」

アストレアがボーデヴィツヒさんの周りを飛び回っているので攻撃しても中らない。そんな中俺はGN粒子をチャージしている。

「退け、アストレア。……………圧縮粒子開放、GNバズーカ・バーストモード」

胸部にあるGNコンデンサーに直結して極太のビームを撃つ。これの欠点は一直線にしか撃てず、反動により左右に動かせない。次に硬直時間が長いので被弾しやすい。

「くっ……………!」

さすがに避けるか。それでもシールドエネルギーを大半を奪ったから良しとするか。

あつ。アリーナのバリアーを貫通しちゃった。あとで怒られそうだなあ。

呆けている間でもボーデヴィツヒさんは近づいてきてるし。硬直が解けるまでGNフィールドを展開しておく。

「ええいつ！ さっさと墮ちろ！」

それにしても目障りだな。プラズマ手刀で斬りつけても大型レール砲で撃ちつけてもGNフィールドを破ることは出来ないのに。唯一破れるのは一夏の零落白夜だけなんだよなあ。

「はあああああ！」

そんなことを思っていたら、一夏がボーデヴィツヒさんに斬りかかっていた。

「航、大丈夫？」

「ん？ 見ての通り平気さ」

いつの間にかシャルルもこっちに来ていた。

四人の中に静寂が訪れ、それを破ったのはボーデヴィツヒさんだった。

「行くぞ……！」

「来い！」

ボーデヴィツヒさんが飛び出そうとしたその瞬間、俺達の間影が割り入ってきた。

ガキンツ！

「・・・・・・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉！？」

「模擬戦をやるのは構わん。・・が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

「織斑、デュノア、山下。お前達もそれでいいな？」

「あ、ああ・・・・・・・・」

どうやら一夏はまだ惚けていて、素で答えていた。

「教師には『はい』と答える。馬鹿者」

「は、はい！」

「僕もそれで構いません」

「同じく」

織斑先生はアリーナ内すべての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンツ！

織斑先生が手を叩き、それは銃声のように響いた。

第九話 激突！ 学年別トーナメント戦

「……………」

「……………」

場所は保健室で、時間は第三アリーナの一件から一時間が経過している。

「別に助けられなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「お前等なあ……………。はあ、でもまあ、怪我がたいしたことなく安心してませ」

「こんなの怪我のうちに入らな……いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味……………」
「っ！」

……………。無理してなんになるんだろっ。

「バカってなによバカって！ バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

一夏がひどい反撃を受けた。口に出してなかったはずだが……………。

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」
「ん？」

シャルルが飲み物を買って戻ってきた。部屋に入ってきたとき至らないことを言って、一夏は聞き取れず、鈴とセシリアはしっかり耳にしたようで、顔を真っ赤にして怒りはじめた。

「ななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！ こここここれだから欧州人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！ そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

「お前等動揺しすぎだ」

二人共まくし立てながらさらに顔が赤くなっている。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましたきましようっ！」

セシリアと鈴は渡された飲み物をひったくるように受け取って、ペットボトルの口を開けるなりごくごくと飲み干す。

「ま、先生も落ち着いてたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら・・・」

ドドドドドドドドッ……………!

「な、なんだ？ 何の音だ？」

一夏が呟いた途端、保健室のドアが吹き飛んだ。

「織斑君！」

「デュノア君！」

「山下君！」

数十名の女子生徒が雪崩れ込んできた。

「な、な、なんだなんだ!？」

「ど、どうしたの、みんな……………ちよ、ちよっと落ち着いて」

『これ!』

状況が飲み込めない俺達に、女子生徒一同が学内の緊急告知文が書かれた申込書を出してきた。

「な、なにになに……………?」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切

りは『・・・』

「ああ、そこまででいいから！ とにかくっ！」

そして一斉に伸びてくる手。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

「私と組まない？ 山下君！」

押しかけてきたのは全員一年の女子だ。学園内で三人しかいない男子ととにかく組もうと、先手必勝とばかりに勇み迫ってきているのだろう。

「悪い。俺はシャルルと組むから」

「まあ、そういうことなら・・・」

「他の女子と組まれるよりはいいし・・・」

「まだ織斑君がいるし・・・」

一夏の方に女子が集まってきた。目で何かを訴えているが無視する。

「一夏、篠ノ之さんと組むんじゃないの？」

「あ、ああ。そうだったな。悪い」

「えー、先客がいたんだ」

とりあえず納得してくれたみたいで、女子達は各々が仕方ないかと口にししながら、保健室を去っていった。

『ふう………』

「あ、あの、航……」

「一夏っ!」

「航さんっ!」

俺と一夏が安堵の溜息をつきシャルルが声をかけようとしたら、セシリアと鈴がベットから飛び出してきた。

「あ、あたしと組みなさいよ！ 幼馴染でしょうが!」

「クラスメイトとしてここはわたくしと!」

今度はこっちを説得しないといけないか………。

「ダメですよ」

『うわっ!?!』

いきなり声をかけられて保健室にいた全員が驚いた。

「お二人のISの状態をさっき確認しましたが、ダメージレベル

ルがCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

「うつ、ぐつ……！ わ、わかりました……」

「不本意ですが……非常に、非常に！ 不本意ですが！ トーナメント参加は辞退します……」

山田先生による説得を素直に受け入れた二人。

「しかし、何だってラウラとバトルすることになったんだ？」

「え、いや、それは……」

「ま、まあ、なんと言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「？ ふっん？」

山田先生が立ち去った後、一夏が疑問に思っていたことをぶつけていた。

「ああ。もしかして一夏と航のことを……」

「あああっ！ デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですね！ まったくです！ おほほほほ！」

「お前等慌てすぎ。その様子だと俺達のことを……」

「あ、ああ。そうする」

一夏が逃げるように保健室から立ち去った。この二人が元気になつたら、骨だけは……気が向いたら拾ってやる。

「あ、あのね、航っ」

「なんだ？」

部屋で夕食を取ったあと、シャルルが口を開いた。

「あの、遅くなっちゃったけど……助けてくれてありがとう」

「気にする必要はない。事情を知ってるのは俺とイカロス達だけだからな」

うーん。そこまで特別なことはしていないんだが、シャルルにとっては違ってみたいだ。

その後、ニンフを呼んで抱き枕にして眠りに着いた。

「しかし、すごいなこりゃ……」

更衣室のモニターから観客席の様子を見る。そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

あんまり興味がなさそうな返事をする一夏。

「一夏はボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

「まあ、な」

「専用機持ちが自分の力を試せないのは、結構苦痛だし」

「感情的にならないでね。彼女は、おそらく一年の中では航の次に強いと思う」

「ああ、わかってる」

本当にわかっているんだろうか。感情的になりやすいからなあ、一夏は。

「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

前日に決まるはずだが、突然変更され手作りの抽選クジ引かされたかさな。うーん、裏がありそうだ。

「一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいよな」

「え？ どうして？」

「待ち時間に色々考えなくても済むだろ。こういうのは勢いが肝心だ。出たところ勝負、思い切りのよさで行きたいだろ」

「ふふっ、そうかもね。僕だったら一番最初に手の内を晒すことになるから、ちょっと考えがマイナスに入っていたかも」

「そうか？ 俺はいかに手を抜いて勝つかを考えるだろう」

「ふーん。人それぞれか」

「あ、対戦相手が決まったみたい」

色々話しているうちに、モニターがトーナメント表へと切り替わった。そこに表示される文字を見ると、

『・・・えっ？』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

出てきた文字を見て、一夏とシャルルは同時に声をあげ、俺は黙ってモニターを見ていた。

一回戦の対戦相手は、

『山下ペアVSボーデヴィツヒペア』 だったから。

「貴様を倒して織斑一夏との決着をつける」

「簡単にやられるかよ」

俺はキュリオスを装着して、ボーデヴィツヒさんと対峙している。

「叩きのめす」

「やれるもんなら、やってみる」

試合開始を同時に左手にあるGNビームサブマシンガンを連射しながら接近する。

「ふん……………」

ボーデヴィツヒさんは回避して右手を突き出す。

俺はすぐに後退してAICの射程範囲から逃れる。

「初見でかわすとは、なかなかやるな」

「そりゃどうも。本番はこれからだ」

ボーデヴィツヒさんはワイヤーブレードを射出して襲って来るが、右手にあるGNビームサーベルで斬ったり、GNビームサブマシンガンで撃ち落としたりして数を減らす。

『シャルル、まだか？』

『あともう少し。………終わつたよ』

俺の時間稼ぎが上手く行ったのか、それともシャルルの腕がいいのか。どちらにしるこれでより戦いやすくなった。

「シャルル、大型レール砲を破壊してくれ」

「まかせて」

ボーデヴィツヒさんの残る武装は大型レール砲とプラズマ手刀にAICのみ。

俺は突撃するがAICにより動きを止められるが、GNフィールドを展開する。

「くそつ。なぜ破れない」

プラズマ手刀で斬りつけたり、大型レール砲で撃ちつけたりするがびくともしない。

「そんなに夢中になっていいのか？ 今は二対一なんだぜ？」

「!？」

慌ててボーデヴィツヒさんが視線を動かすが、既に遅い。零距离まで接近したシャルルが、素早くショットガンの六連射を叩き込み、大型レール砲を破壊した。

「くっ……！！」

良し、隙が出来た。攻めるなら今しかない。

「今だ、シャルル！」

「この距離なら、外さない」

シャルルの盾の装甲が弾け飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が露出する。六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻》グレー・スケール。通称

「『盾殺し（シールド・ピアース）』……！！」

初めて、ボーデヴィツヒさんの表情に焦りが見えた。驚くのはまだ早いぜ。

GNシールドをクロードモードにして、シャルルと一緒に瞬時加速をする。

「捕まえた」

「何っ!？」

ボーデヴィツヒさんをGNシールド・クローモードで挟み、通常使われない武装、GNシールドニードルで突き刺し、GNビームサーベルを逆手に持ち、上から刺し込む。

「ぐっつっ……！！」

ボーデヴィツヒさんの腹部に、パイルバンカーが、脇腹にGNシールドニードル、背中にGNビームサーベルの一撃がそれぞれ叩き込まれる。ISのシールドエネルギーが集中して絶対防御を発動して防ぐものの、そのエネルギー残量をごっそり奪う。しかも相殺しきれなかった衝撃が深く体を貫く。

次の瞬間、異変が起きた。

(力が、欲しい)

『……願うか……？……？ 汝、自らの変革を望むか……？……？ より強い力を欲するか……？……？』

(力を………比類無き最強を、唯一無二の絶対を……私に
よこせ！)

『Damage Level………D』

Mind Condition………Uplift

C e r t i f i c a t i o n C l e a r .
《 V a l l k y r i e T r a c e S y s t e m 》
b o o t . 『 』

「あああああつ！！！！」

突然、ボーデヴィツヒさんが身を裂かんばかりの絶叫を発する。同時にシュヴァルツエア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、俺とシャルルの体が吹き飛ばされた。

「ちつ！ 一体何が起きた？」

「なっ！？」

俺とシャルルは目を疑った。その視線の先では、ボーデヴィツヒさんが そのISが変わっていた。

「あれは 《雪片》か」

まずいな。一夏が飛び出して来るだろう。

『イカロス、アストレア。今すぐ一夏を取り押さえる。無理ならイージスを展開して一夏を閉じ込めてる』

『了解しました』

これで心置きなく戦闘を続行できる。

姿をキュリオスからエクシアに変え、GNソード・ソードモードにして構える。

『非常事態発令！ トーナメントの全試合は中止！ 状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！ 来賓、生徒はすぐに避難すること！ 繰り返す！』

「シャルル、時間稼ぎするから、一般生徒と共に下がってくれ」

「わかった。けど、無茶しないで」

「ああ」

さて、律儀に待ってくれたから全力で相手をするか。

「行くぜ。TRANS・AM」

機体が赤くなり、機体性能が大幅に上がる。

腰にあるGNロングブレードを取り出し、雪片を受け止め、右手にあるGNソードで雪片のグリップを切り裂く。そして、縦に浅くGNソードで斬る。

「ぎ、ぎ……ガ……」

黒いISに紫電が走り、真っ二つに割れた。中から出てきたボーデヴィツヒさんを受け止める。

「う、あ……………」

ぼやっとした光が天井から降りているのを感じて、ボーデヴィツヒさんは目を覚ましたようだ。

「気がついたか」

織斑先生がボーデヴィツヒさんに声を掛けた。

「私……………は……………?」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けないだろう。無理をするな」

織斑先生がそれとなくはぐらかしたつもりだったが、そこはさすがにかつての教え子だったので、簡単に誘導されなかった。

「何が……………起きたのですか……………?」

「ふう……………。一応、重要案件である上に機密事項なのだから。VTシステムは知っているな?」

「はい……………。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……………。過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあれば……………」

「そう、IS条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用すべてが禁止されている。それがお前のISに積み重ねられていた」

「……………」

「巧妙に隠されてはいたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志……………いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

織斑先生の言葉を聞きながら、ボーデヴィツヒさんはシートを握りしめていた。

「私が……………望んだからですね」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はいっ—！」

いきなり名前を呼ばれ、ボーデヴィツヒさんは驚きながら顔を上げた。

「お前は誰だ？」

「わ、私は……………。私……………は……………」

「

その言葉の続きが出てこない。どうしても今の状態では言えな

つたみたいだ。

「誰でもないのなら、ちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒになるがいい。何、時間は山のようにあるぞ。なにせ三年間はこの学園に在籍しなければいけないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ……………」

織斑先生の言葉が意外だったのか、ただぼかんと口を開けていた。

織斑先生は席を立ててベッドから離れた。もう言うべきことは言ったのだろう。

「ああ、それから」

ドアに手をかけてところで、振り向かずにボーデヴィツヒさんに言葉を投げかけた。

「お前は私にはなれないぞ。こつ見えて心労が絶えないからな。あとは山下とでも話しをしておけ。少しは気が紛れるだろう」

そう言つて織斑先生は去つて行った。

「貴様にとつて力とは何だ？」

「俺にとつて力は正直分からない。ただ言えることは人によつて力の意味が違うことだ」

「どういうことだ？」

「例えば、一夏なら守りたい人がいるため。以前のお前なら他人が気に入らないから痛めつけるため。そして俺は抑止力となるため。どうだ人によって力の意味が異なるだろう？」

「なるほど。だが何故貴様が抑止力になるとは、どういう意味だ？」

「それは教えられないが、ヒントを与えよう。一つ目はIS、二つ目は俺と一夏が卒業したらどうなるか？ 以上の二つのことを考えたら自ずと解るさ」

そこまで言って、俺は保健室を立ち去った。

第一〇話 貴公子のあり方

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上』

誰かが学食のテレビを消した。俺とイカロス達は部屋に食材があまり無いため食堂に来ていた。

「ふむ。シャルルの予想通りになったな」

「そうだねえ。あ、航、七味取って」

「はい」

「ありがとう」

当事者なのにのんびりしているが、先程まで教師陣から事情聴取されていた。

「ふー、ごちそうさま。学食といい、寮食堂といい、この学園は本当に料理がうまくて幸せだ。……ん？」

俺達の食事が終わるのを今か今かと心待ちにしていた女子一同が酷く落胆している。

「……優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うわあああんっ！」

数十名の女子が泣きながら走り去っていった。

「どうしたんだろうっね？」

「さあ……？」

「例の噂のことじゃない？」

「ふーん」

女子が去った後に、一人呆然と立ちつくしている姿を見つけた。

「……………」

それは一夏の幼馴染の箒だった。

口から魂が抜けているような姿だが、一夏が箒の側に移動した。

「そういえば箒。先月の約束だが」

「(ぴくっ)」

あっ、ちょっと反応した。

「付き合ってもいいぞ」

「なに？」

「だから、付き合ってもいいって……おわっ！？」

突然、バネのように大きく動いた箒は、一夏を締め上げた。

「ほ、ほ、本当、か？ 本当に、本当に、本当なのだな!？」

何回本当を繰り返すのだろうか？

「お、おう」

「な、なぜ？ り、理由を聞こうではないか……」

ぱっと一夏を離し、腕組みをして咳払いをする箒。

「そりゃ幼馴染の頼みだからな。付き合つた」

「そ、そうか!」

「買い物くらい」

「……………」

箒の気分が天国から地獄に叩き落とされた。

「……………だろつと……………」

「お、おう?」

「そんなことだろつと思っただわ!」

どげっしっ……!……!

「ぐはぁっ！」

腰の捻りを加えた正拳。

「ふん！」

どじもっ…

呻く一夏の鳩尾に爪先がささった。

「ぐ、ぐ、ぐっ……」

ずかずかと去っていく筈を視線で負うことも出来ず、一夏はその場に崩れ気絶した。

「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね」

「だが、素で言ってるんだよな」

二人で感心していると山田先生が来た。

「あ、デユノア君に山下君。ここに居ましたか。織斑君は気絶しているんですか？」

「はい。人の心を弄んだ結果です」

「そうですね。それよりも、朗報です！」

山田先生が両手拳を握りしめてガッツポーズをした。

「なんとですね！ ついについに今日から男子の大浴場の使用が解禁です！」

「そうなんですか。てつきりまだ先にことだろうと思っていましたから」

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があったので、もともと生徒達が使えない日なんです。でも点検自体はもう終わったので、それなら男子の三人に使ってもらおうって計らいなんですよー」

「そうですか。ありがとうございます、山田先生」

大浴場か。イカロス達も入れさせてあげたいなあ。

「織斑君は次の機会として、お二人は早速お風呂にどうぞ。今日の疲れもスッキリ！ ですよ」

「では早速　ん？」

まずいな。シャルルの本来の性別は女性で今のところ男性で通している。しかし、別々に入るのも不自然になるしなあ。

「どうしたんですか？　ほらほら、二人共早く着替えを取りに行ってください。大浴場の鍵は私が持っていますから、脱衣場の前で待ってますね。じゃあ」

そう言っすたすたと歩いて行ってしまった。

「……シャルル」

「う、うん。困った……ね。どうしよう。と、とりあえず、着替えを取りに部屋に戻るうか」

「ああ……。何かしらの名案が思いつくの在天に委ねよう……」
部屋に戻ってイカロス達を見たら名案が浮かび、イカロス達も誘って大浴場に向かった。

「あ、来ましたね。其方の方々は？」

「女子の入浴時に入れると揉みくちやにされる虞があったので連れて来ました。勿論イカロス達とは別々に入るので心配いりません」

「そうなんですか。それじゃあどうぞ！ 一番風呂ですよ！」

「ど、どうも……」

幾分テンション高めの山田先生に見送られ、脱衣所のドアが閉まった。

「イカロス、カードで男物の水着一着と女物の水着四着取り寄せてくれ」

「はい、マスター」

イカロスに指示を出してから数秒後、イカロスの手には五着の水着が出現した。

「なるほど、その手があったね。僕には思いつかなかったよ」

シャルルが感心していると、

「マスター、コレの持続時間はおよそ一時間です。なるべくお急ぎ下さい」

「そうか。ありがとなイカロス」

俺はイカロスの頭を撫でた。すると横から視線を感じたので見ると、三人がこちらを見ていた。

「イカロス先輩だけずるいですよ!」

「そうよ。 だけ撫でるなんて!」

「僕にも撫でてほしい……かな」

「はいはい。撫でればいいんだろ、撫でれば」

そう言っつて順番に頭を撫でた。

『……………』

「俺は先に着替えて入っているから、水着に着替えたらいよいよ」

四人に告げてから大浴場に入った。

中に入って気付いたことは、広く様々な設備が整っている。金の無駄遣いのし過ぎではないだろうか。

十分ほどすると脱衣場の扉が開いた。

「お邪魔します……」

「イカロス先輩、ニンフ先輩見て下さい。結構広いですよ」

「全く。、はしゃがないですよ。こっちが恥ずかしいじゃない」

「マスター。どうですか、似合っていますか？」

「ん？ ああ、よく似合ってるよ」

「……………」

表情は乏しいが僅かに喜んでるようだ。

「航、そ、その、話があるんだ。大事なことから、きちんと聞いて欲しい……」

「わかった」

シャルルが湯船に入ってきた。

「その……前に言っていたこと、なんだけど」

「これからのことか？」

「うん。僕ね、ここにしようと思う。僕はまだここだって思える居場所を見つけられていないし、それに……」

「それに？」

「航がいるから、僕はここにいたいと思うんだ」

「そうか……」

シャルルは自分で考えて結論を出したのなら、俺は何も言うべきではないな。

「それと、もう一つ決めただ」

「何を決めただ？」

「僕のこととはこれからシャルロットって呼んでくれる？ 二人きりの時かイカロスさん達が居る時だけでいいから」

「それが本当の名前？」

「うん。お母さんがくれた、本当の名前」

「わかった シャルロット」

「ん」

嬉しそうにシャルロットが返事をした。

「それじゃあ僕は体と髪を洗っちゃうね！」

そう言ってシャルロットは湯船から上がった。

「こつち覗いちゃダメだよ？」

「俺に覗く趣味はないぞ」

「……。覗いてもいいのに……」

「ん？ 何か言ったか？」

「ううん。なんでもないよ」

シャルロットが何か言った気がしたが誤魔化された。

その後、俺は風呂場から出てシャルロットが上がるまでISの状態を見ていた。いつの間にかイカロス達は居なくなっていた。おそらく部屋に戻ったのだろう。

それから部屋に帰って他愛もない話をして眠りについた。

翌日。朝のホームルームにはシャルロットとボーデヴィツヒさんの姿がなかった。

「み、みなさん、おはようございます……」

教室に入ってきた山田先生はなぜかふらふらとしている。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生と

いいですか、すでに紹介は済んでいるといいですか、ええと……」

なにやら山田先生の説明はよくわからないし、歯切れが悪い。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

ん？ この声って……。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてお願いします」

スカート姿のシャルロットが礼をした。クラス全員がぽかんとしたままだ。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということではああ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業です……」

山田先生の憂いはそこだったのか。

「え？ デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！ 美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、山下君、同室だから知らないってことは」

「ちょっと待って！ 昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

ザワザワザワッ！

教室が一斉に喧騒に包まれ、それはあっという間に溢れかえった。
バシーン！

教室のドアが蹴破られたような勢いで開いた。

「一夏あつ！！！！」

鈴がISを展開して現れた。

「俺は昨日、大浴場に行つてねえー！」

「問答無用！ 死ねー！！！！！」

鈴の龍砲がチャージを始めた。

「航、悪いけど犠牲になってくれ」

一夏が俺を盾にして距離を取った。

「なつ！？ 一夏てめえ、今日の特訓は今まで以上だからな。逃げるなよ」

と、こんなこと言ってる場合じゃない。このままでは衝撃砲が直撃する。

俺はすぐにデュナメスを展開し、GNフルシールドを前方に、GNフィールドをそれぞれ展開した。

両方の展開をしたら、衝撃砲が放たれていた。

ズドドドオンッ！

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

怒りのあまり肩で鈴が息をしている。というか、衝撃が少なからずあるはずなんだが、何故か衝撃がなかった。

「……………」

俺と鈴の間に割り込んできたのはボーデヴィツヒさんだった。

「お前のISは直ったのか？」

「……………コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」

「へー。そうなんだ。って、何してるんだ？」

ボーデヴィツヒさんが俺を掴もうとしているがGNフィールドを展開中なので掴むことが出来ない。

ボーデヴィツヒさんは俺を掴むことを諦め、指を指してきた。

「お前は私の嫁にする！ 決定事項だ！ 異論は認めん！」

「……………嫁？ 婿じゃなくて？」

おい、一夏。なんで冷静に突っ込みしてんだ？

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

誰だ間違った知識を吹き込んだ奴は？

「アンタねえええっ！！！」

ジャキン！

再び衝撃砲が開いた。

「待て！ 俺は悪くない！」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが！ 全部！ 絶対！ アンタが悪い！！！」

よし、この混乱に乗じて脱出を試みる。

ビュンッ！

GNフィールドにレーザーが当たった。

「あら、航さん？ どこかにお出掛けですか？ わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがあります。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほ……」

まずい。このままでは教室が滅茶苦茶になる。となると手段は一つ。一夏を連れて教室から脱出することしかない。

デユナメスからエクシアに変更し、左手で一夏の後ろ襟を掴んで窓に向かう。

「勝負がしたい奴は付いて来い」

そう言っつて俺は窓から飛び出し、アリーナに向かって飛んで行く。

その日の二時限は生徒の暴走によって潰れた。

第一一話 買い物

週末の日曜。俺はエンジェロイドの三人とシャルロットの五人で隣街のショッピングモールに来ている。

「悪いな、シャルロット。買い物に付き合わせて」

「ううん。そんなことないよ。でも、どうして僕を誘ったの？」

「臨海学校に持って行く水着を買うのと、イカロス達の普段着と水着を買ってあげようと思ったのだが、どのような服を選んだらいいのか判らないからシャルロットに白羽の矢が当たった訳だ。頼りにしてるよ、シャルロット」

「そっか。それじゃあ僕、張り切っちゃうね」

それにしてもここは人が多いなあ。いつも買い物は商店街に行っているからこれほど広いと迷いそうだ。

「シャルロット、手を出して」

「はいっ」

シャルロットが手を出したのを見て左手で握る。

「わ、航。急にどうしたの？」

「どうしたって、逸れないための処置。アストレアもおいで」

「はい」

アストレアが返事をして俺の右手を握った。これで両手に花の状態になった。

「ところでシャルロット」

「ん？ なあに？」

「せっかくの呼び名が普通になったから、俺達の間柄でなにか別の呼び名でも考えるか？」

「えっ。い、いいの？」

「シャルロットさえ良ければ」

俺の答えにシャルロットは縦に首を振った。

「う、うん。全然大丈夫。せ、せっかくだし、お願いしよっかな」
「うーん。普段の声より少し高い気がしたのだが気のせいだろう。」

「『シャル』なんてどうだ？ 呼びやすく、親しみやすいし」

「シャル。 うん！ いいよ！ すごくいい！」

「そうか。そんなに思いつきり反応するなんて、えらく気に入ったんだな」

「ま、まあ、ね。シャル……シャル、かあ。うふふっ」

「おい、シャル。シャル？ 駄目だ、反応しない」

シャルが幸福感に浸って俺の音が聞こえてないみたいなので、シャルを引っ張って服を扱っている店を目指した。

「……………」

「……………」

自動販売機の近くに隠れている影が二つ。片方はツインテール。もう片方はブロンドヘア。つまり、鈴とセシリアである。

「……あのさあ」

「……なんですの?」

「……あの二組、手え握ってない?」

「……握ってますわね」

百人が見たら百人ともそう返すであろう言葉を発して、セシリアは引きつった笑顔のまま持っていたペットボトルを握りしめた。

「そっか、やっぱりそっか。あたしの見間違いでもなく、白昼夢でもなく、やっぱりそっか。よし、殺そう」

握りしめた鈴の拳は、すでにISアーマーが部分展開していて準戦闘モードに入っていた。

「ほう、楽しそうだな。では私も交ぜるがいい」

『!?!』

いきなり背後からかけられた声に、驚いて振り返り、そこに立っていたのはラウラだった。

「なっ!?! あ、あんたいつの間に!」

「そう警戒するな。今のところ、お前達に危害を加えるつもりはないぞ」

「し、信じられるものですか! 再戦というのなら受けて立ちますわよ!?!」

「あのことは、まあ許せ」

「ゆ、許せって、あんたねえ……!」

「はい、そうですかと言えるわけが……!」

「そうか。では私は航を追うので、これで失礼するとしよう」

そう言って歩きはじめたので、鈴とセシリアが慌てて止めた。

「ちょっと、ちょっと待ちなさいよ!」

「そ、そうですね！ 追ってどうしようといいますの！？」

「決まっているだろう。私も交ざる。それだけだ」

「ま、待ちなさい。待ちなさいよ。未知数の敵と戦うにはまずは情報収集が先決、そうでしょう？」

「ふむ、一理あるな、ではどうする？」

「ここは追跡ののち、それぞれの関係がどのような状態にあるの
かを見極めるべきですわね」

「なるほどな。では、そうしよう」

かくして、何が何だがよくわからないうちにおかしな追跡トリオ
が結成された。

「えっと、水着売り場はこの辺かな？」

イカロス達の普段着を買った後、店内を歩き回って水着売り場に
やって来た。

「先に俺の水着を買いに行くが、四人はどうする？ 俺について
くる？ それともここで待つ？」

「じゃあ僕はここで待ってるね」

「それでは私もシャルさんとお待ちします」

「とシャルだけじゃ心配だから私も残るわ」

「はいはい。私はマスターについて行く」

アストレア以外はここで待つのか。

「なるべく早く戻るから。行くぞ、アストレア」

「はい」

俺とアストレアはシャル達を残して男用の水着売り場に向かった。

「アストレア、どんな水着が似合うと思う？」

「うーん。ブーメラン？」

「訊いた俺が馬鹿だった」

アストレアのセンスの無さが思い知らされたため、無難に黒のトランクスタイプにした。

それから数分後。アストレアと共にシャル達と別れた場所に向かい合流する。

「待たせたな。次はシャル達の水着だな。さっさと行くつぜ」

「そうだね」

そう言って五人で女性用水着売り場に足を踏み入れた。

日曜日ということもあって、そこそこ女性客の姿が目につく。向こうも、女物の売り場に男が入ってきたということですぐに気付いたようだ。

「そのあなた」

「何のようだ」

「その水着、片付けておいて」

と、見知らぬ相手から命令された。

「嫌だね。自分で散らかしたなら、自分で片付けな」

少なくとも俺の知り合いでないと聞く気はない。

「ふうん、そういうこと言うの。自分の立場が判ってないみたいね」

「そうだな。それはアンタみただけど」

「なんですって」

アストレアが超振動光子剣『クリュサオル
ウラヌス・クイン』を突きつけ、イカロスが空の女王モードで超々高熱体圧縮対艦砲『ヘパイス
トス』の砲口を向けている。

「命が惜しいなら、さつさと去れ。この二人相手に警備員など通
用しないからな」

「っ！ ……覚えておきなさい」

そう言っで見知らぬ女性は去っていった。

「ありがとな、二人共」

俺はイカロスとアストレアにお礼を言い、頭を撫でた。

「……………」

「えへへ……………」

アストレアといつもの通常モードに戻ったイカロスは見る限り喜
んでいた。

武装を解除した二人と店内を回り、試着室の近くに行くと見知っ
た人がいた。

「いいですか。試着室に二人で入るのは感心しませんよ。教育的
にもダメです」

『す、すみません……………』

一夏と箒が山田先生に説教を喰らっていた。

「それで先生方も水着を買いに？」

「まあ、そんなところだ。それと職務中ではないため、先生と呼ばなくていい」

俺の問いに近くに居た織斑先生が答えた。

そういえば、学年別トーナメント戦以来毎日夕食を食べに織斑先生と時々山田先生が来るのは何故なんだ。

と、思考していると

「そこに隠れている二人。そろそろ出てきたらどうだ？」

織斑先生が柱の方に向かって言った。すると、

「そ、そろそろ出てこようかと思ってたのよ」

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

柱の陰から鈴とセシリアが現れた。

「なにをこそこそしているのかと思って、ずっと気になってたんだがな」

「女子には男子に知られたくない買い物があんの！」

「そ、そうですね！ まったく、一夏さんのデリカシーのなさにはいつもながら呆れてしまいますわね」

一夏が二人に非難されている。

「さつさと買い物を買わせて退散するでしょう」

織斑先生が溜息混じりに言った。

「ほら三人共、好きな水着選んでおいで。お金は……イカロスに渡しておくから。ついでに下着もそれぞれ二着ずつぐらい買ったら？」

「分かった。行こう、」

「待ってください、ニンフ先輩」

「それでは行ってきます、マスター」

「ああ、行ってらっしゃい。この辺で待ってるから」

イカロスにお金を渡したら、三人は水着や下着を買いに行った。

「あれ？ 織斑先生、山田先生や他の皆は何処に行ったのですか？」

「山田先生達は私達に気を遣って向こうに行った」

イカロス達と話し込んでたから気が付かなかった。

「一夏に航」

「な、なんですか？ 織斑先生」

「なんでしょう？」

初めて名前で呼ばれたため、少し緊張する。

「今は就業中ではないからな、名前でいい」

「わ、わかった」

「それでは名字だと一夏と同じなので千冬さんと呼ばせてもらいます」

「ふむ、いいだろう。で、どっちの水着がいいと思う？」

そう言っただ冬さんが見せてきたのは専用のハンガーにかけられたビキニの水着二着だった。

片方はスポーティーでありながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出している黒の水着。

もう片方は一切の無駄を省いたような機能性重視の白の水着。

一夏を見ると黒の水着を注視していた。

「白の方」

一夏が先に答えた。自然を装ったつもりだろうが相手が姉だから見抜かれるだろうな。

「黒の方が」

「いや、白の方」

「嘘をつけ。お前が先に注視していたのは黒の方だったぞ。昔から、お前は気に入った方を注意深く見るからな。すぐわかる。それで航は？」

「俺は白の方がいい」

「ほう。なぜだ？」

「学園ではいつも黒か紺のスーツですから、違った色の方がいいかと」「ふむ、なるほどな」

もしかして変なことを言ってしまったか？

「それより千冬姉、彼氏とか作らないのか？　そういう話、一回も聞いたことないしさ」

「手の掛かる弟が自立したらな。考える」

確かに。いつも通りに呼んだら出席簿が落ちているからな。

「で、お前達の方はどうなんだ？」

「え？　俺達？　何が？」

「何がも何も、お前達は彼女を作らないのか？　幸い学園内には腐るほど女がいるし、よりどりみどりだろう？」

よりどりみどりって……確かにそうなだけあって否定できない。

「そうだな……。航、ラウラなんかはどうだ？ 色々と問題はあ
るだろうが、あれで一途な奴だぞ。容姿だって悪くはあるまい」

「それはそうですけど……」

「なんだ、不満でもあるのか？」

「そもそも、教え子を紹介するのはおかしいのでは？」

「……一理あるな」

正論を言ったはずなのに釈然としない。

「まあ、何にしても私の心配をする前に自分の方をどうにかする
んだな。私はまだ、弟に気を遣われるような歳ではないさ」

「わかったよ。変な心配はしない。これでいいだろ？」

「ああ。それでいい」

最後にニヤリとした笑みを残して、千冬さんはレジの方に向かっ
た。

話が終わるとイカロス達が戻ってきて、一夏とその場で別れ買い
物を楽しんだ。

第一二話 臨海学校初日

「海っ！ 見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声を上げる。

海が見えるとクラスのテンションが上がるのに対して俺は逆に下がり、苛ついていた。原因は特例として同行を許された、補助席に座っている三体のエンジェロイドだ。

窓側から順にセシリアに俺、アストレア、シャル、ラウラとなっており、アストレアの前にニンフ、後ろにイカロスが座っている。

イカロスは両隣から翼を触られ、ニンフはお菓子を貰っている。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

織斑先生の言葉で全員がさっとそれに従う。相変わらず指導力抜群だった。

言葉通りほどなくしてバスは目的地である旅館に到着した。四台のバスからIS学園一年生+三名が出てきて整列した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

『よろしくお願いしまーす』

織斑先生の言葉の後、全員で挨拶をする。この旅館には毎年お世

話になっているらしく、着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀をした。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

「元気があり過ぎて、困っています。」

「あら、こちらが噂の……?」

ふと、俺達と目が合った女将が織斑先生に尋ねる。

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなってしまうって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子達じゃありませんか。しっかりしてそうな感じを受けますよ」

「感じがするだけです。挨拶をしる、馬鹿者」

ぐいっと頭を押さえられる。話をしていたので出来なかったんだって。

「お、織斑一夏です。よろしく願います」

「山下航です。よろしく願います」

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

そう言って女将さんはまた丁寧なお辞儀をする。っていつか、一夏。何故言葉を詰まらせる。

「出来ない生徒で」ご迷惑をお掛けします」

「あらあら。織斑先生つたら、生徒には随分厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので」

「夏よりも無いはずだが、どうなんだろう？」

「それじゃあ皆さん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、其方をご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

女子一同は、返事をするやうささま旅館の中へ向かった。

初日は終日自由時間で食事は旅館の食堂にて各自とるようにと言われている。

「ね、ね、ねー。おりむ〜、やまし〜」

この呼び方は布仏さんだな。振り向くと、異様に遅い移動速度でこっちに向かってきていた。

「おりむー達って部屋どこ〜？ 一覧に書いてなかったー。遊びに行くから教えて〜」

その言葉で周りにいた女子が一斉に聞き耳を立てるのがわかる。

……夜は注意しないと。

「いや、俺達も知らない。廊下にも寝るんじゃないの？」

「わー、それはいいね。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいって〜」

一夏、それだけは絶対ないから。

ちなみに女子と寝泊りさせるわけにも行かないということで、俺達の部屋はどこか別の場所が用意されている。

「織斑、山下、お前達の部屋はこっちだ。ついてこい」

「えーっと、織斑先生。俺達の部屋ってどこになるんでしょうか？」

「黙ってついてこい」

一夏が言論封殺された。ちなみに俺と一夏の後ろをエンジニアロイドの三人がついてきている。

「ここだ」

「え？ ここって……」

ドアに張られた紙は『教員室』と書かれている。なるほど……。

「最初は個室という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってだな」

溜息をついて織斑先生が続ける。

「結果、織斑は私と、隣の部屋で山下達は山田先生と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれとは近づけないだろう」

「そりゃまあ、そうだろうけど……」

確かに。俺達のために霸王の寝床に入る人はいないだろう。

「一応言っておくが、あくまで私は教員だということを忘れるな」

「はい、織斑先生」

「はい」

「それでいい」

部屋の中を覗くと二人部屋なのに広々とした間取りになっていて、外側の壁が一面窓になっている。

「一応、大浴場も使えるが男のお前達は時間交代だ。本来ならば男女別になっているが、何せ一学年全員だからな。お前達二人のために残りの全員が窮屈な思いをするのはおかしいだろう。よって、一部の時間のみ使用可だ。深夜、早朝に入りたければ部屋の方を使え」

「わかりました」

「了解した。一夏、早く海に行こうぜ」

「おう、そうだな」

俺達は一旦それぞれの部屋に入り、必要な物を持って部屋を出る。その後、一夏と合流して俺達は海に向かった。

「……………」

「……………」

千冬さんを除いた先ほどのメンバーと篝は更衣室のある別館へ向かう途中で出くわした。それはまだいい。

問題は道端に、ウサミミが生えていることだ。しかもご丁寧に『引っ張ってください』という張り紙がしてある。

「なあ、これって」

「知らん。私に訊くな。関係ない」

言い切る前に即否定。これは何かあるな。

「えーと……………抜くぞ?」

「好きにしる。私には関係ない」

そう言って歩き去ってしまう。

「ニンプ、そのウサミミをハッキングできないか?」

「わかった、やってみる。……駄目みたい。地面の中には誰もいないわよ」

「そうか。イカロス、ウサミミの地点から上空に向けて H e p h a i s t o s を撃て」

「了解しました」

イカロスが空の女王モードになって H e p h a i s t o s の砲口を上空に向けて撃ったら、何かに当たりそのまま海の方に落ちていった。

『……………』

うん。何も見なかったことにしておこう。

とりあえずウサミミを回収し、改めて更衣室に向かう。

当然だが男である俺と一夏は別館の更衣室でも一番奥を使用するようにと言われている。

一番奥の更衣室ということは、必然的に女子の更衣室を横切るわけで、中からきゃいきゃいと黄色い声が聞こえてしまう。

「わ、ミカってば胸おつきー。また育ったんじゃないの〜?」

「きゃあっ! も、揉まないでよあっ!」

「ティナって水着だったーん。すっごいね〜」

「そう？ アメリカでは普通だと思うけど」

一夏がやや早足で立ち去り、イカロス達とは一つ手前の更衣室で別れた。

更衣室に入ると誰も居なかった。どうやら一夏と入れ違いになったみたいだ。何をしようかと考えているうちに着替え終わった。

パーカーを羽織って浜辺に出ると一夏が鈴を肩車をしていた。

「お前等、何をしてるんだ」

「何って、肩車。或いは移動監視塔ごっこ」

「ごっこかよ」

「そりゃそうでしょ。あたし、ライフセーバーの資格とか持ってないし」

「うーん、そう言われるとそうか」

「でしょ？ まあ、溺れている子がいたら助けるけどね」

二人で会話が盛り上がっているので、俺はその場から静かに立ち去る。

特にすることなくウロウロしていたら、セシリアがビーチパラソルとシート、サンオイルを持って俺の方に来るのが見えた。

「航さん、此方に居られたんですね？」

「まあな」

「背中にサンオイルを塗ってもらいたいのですが」

「背中だけなら」

「それでは、お願いしますわね」

そう言つて、パラソルを広げて砂浜に刺し、シートを敷き、首の後ろで結んでいた紐を解くと、水着の上から胸を押さえてシートに寝そべった。

「さ、さあ、どうぞ？」

「じゃあ、早速」

サンオイルを手に取り温めてからセシリアの背中を塗る。

「ん……。いい感じですね。航さん、もっと下の方も」

「背中だけの約束だったから、これで終わりな」

「残念ですけど仕方ありませんわね」

「じゃあ、俺はこれで」

「ええ、では後ほど」

セシリアと別れて再び歩いていた。

「あ、航。ここにいたんだ」

声に呼ばれて振り向くと、そこにはエンジェロイドの三人とシャルと

「ん？ 誰だ、この暑い中バスタオルに包まっている奴は」

「ほら、出てきなつてば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

バスタオル越しに眼帯とレッグバンドで大体予想していたが、先程の声で確信した。コイツはラウラだ。

「ほーら、折角水着に着替えたんだから、航に見てもらわないと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあつてだな……」

「もー。そんなこと言つてさつきから全然出てこないじゃない。

一応僕も手伝つたんだし、見る権利はあると思うなあ」

さつきからラウラがバスタオルを取ろうとしない。

「うーん、ラウラが出てこないんなら僕も航達と遊びに行こうかなあ」

「な、なに？」

「そうね。行こう、マスター」

シャルとアストレアが腕を絡ませて、ニンフが俺の背中を押している。その後ろをイカロスが付いてくる。

「ま、待てっ。わ、私も行こう」

「その格好のまんまで？」

「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

バスタオルをかなぐり捨て、水着姿のラウラが陽光の下に現れる。しかもその水着というのが

「わ、笑いたければ笑うがいい……！」

黒の水着でレースをふんだんにあしらひ、髪は左右で一对のアツプテールになっている。

「……………ぷすす」

アストレアが口に手を当てて密かに笑っているのをラウラが気付いた。

「貴様、よくも笑ったな！ 待て！ 逃げるな！！」

「ぷすすっ。だって笑えって言ったじゃない」

アストレアが笑いながら逃げ、それをラウラが追いかけている。

「山下くーん！」

「一緒にビーチバレーしようよ！」

「わー、やましーと対戦。ばきゅんばきゅーん」

布仏さん達数人の女子に誘われたので受けることにする。

「航も一緒にしようぜ」

「わかった。ラウラ、アストレア、戻って来い」

「はい」

俺の呼びかけに素直に来るアストレアとラウラ。

「じゃ、俺は最初の方は見てるから。エンジェロイドは一纏めで早速始めようぜ」

俺の返事を聞いてから手早くネットを広げる女子二名、布仏さんは砂の上にコート線の線を引いていた。

ちなみに対戦メンバーはネットを広げた二人と一夏VSイカロス、ニンフ、アストレアになっている。俺とシャル、ラウラ、布仏さんが観戦にする。

「んじゃ、お遊びルールでいいよね。タッチは三回まで、スパイク連発禁止、キリのいい十点先取で一セットねー」

「おう。じゃ、そっちのサーブで」

ああ、一夏達は終わったな。

イカロスのジャンピングサーブ。角度が鋭く、スピードはビーチバレーの選手よりも速いため、一夏達は反応出来ずにエンジェロイドチームに点が入った。

そのままイカロスが立て続けに点を入れて、ニンフの番に移り、持ち前のコントロールで狙ったところにボールが落ちる。

一夏達の番はアストレアのミスで漸く移ったのだが、すぐにイカロス達に移り、そのままあっさり負けた。

「航、あいつら強すぎだろ」

「あれでも力をセーブさせているんだが」

実際にジャンプはさせても飛ぶことは許可してないし。

「あ、そろそろお昼の時間かな？ 航、午後はどうするの？」

「そうだな、少しのんびりする予定だ」

「そつか。じゃあ、お昼に行こ。それと航達は結局どこの部屋だったの？」

「あー、それ私も聞きたい！」

「私も私も！」

「わたしも〜。冷たい床情報は共有しよ〜」

布仏さんの言葉に他の人は解ってなかった。

「えーと、俺が織斑先生の部屋で航は隣の部屋だぞ」

それまでワクワクとした顔をしていた女子一同がぴしっと凍り付いた。

「だからまあ、遊びに来るのは危険だな」

「そ、そうね……。でも織斑君達とは食事時間に会えるしね！」

「だね！ わざわざ鬼の寢床に入らなくても」

「誰が鬼だ、誰が」

ドン！ と何か音が聞こえた気がした。一同、軋んだ動作で首を動かす。

「お、お、織斑先生……」

「おっ」

ラウラとは印象が異なる黒の水着を身に纏っている。

「ほら、お前達は食堂に行って昼食でもとってこい」

「先生は？」

「私はわずかばかりの自由時間を満喫させてもらおうとしよう」

「じゃあ、俺達は昼飯に行ってきます」

「集合時間には遅れるなよ」

「はい」

それだけ言っただけでその場を離れる。ちょうど十二時を過ぎたところなので、俺達以外にも生徒達が移動していた。

「昼飯、何が出るんだろう？ 海に来てるから刺身が出たりして」

「お刺身！ いいね、新鮮なの大好きだよ」

シャルはこの様に日本文化にもすっかり適応している。セシリアは適応出来ず、ラウラは別の意味で適応している。

そういえばイカロスが撃墜した物体は海の方に行っただけで見当たらなかったな。

そんなことを考えながら、俺達は旅館に戻った。

第一三話 臨海学校初日 夜

時間はあつという間に過ぎ、現在七時半。大広間三つを繋げた大宴会場で、俺達は夕食を取っていた。

「うまい。昼と夜に刺身が出るとは豪勢だ」

「そうだね。ほんと、IS学園って羽振りがいいよ」

そう言って頷いたのは俺の右隣に座っているシャル。

今は全員が浴衣姿だ。なんでも、この旅館の決まりで『お食事中は浴衣着用』となっている。普通、禁止ではないだろうか？

ずらりと並んだ一学年の生徒は座敷とテーブル席に分かれている。

メニューはカワハギの刺身と小鍋に山菜の和え物が二種類、赤出汁の味噌汁、お新香だ。

「この山菜、本わさだ。高校生の食事に出すものじゃないぞ」

「本わさ？」

「ああ、シャルは知らないか。本物の山菜を卸したものを本わさって言うんだ」

「えっ？ じゃあ、学園の刺身定食で付いているのって……」

「あれは練りわさじゃないのか。俺は普段定食は食べないからわ

からないけど」

「ふうん。じゃあこれが本当の山葵なんだ？」

「そう。只これの食べ方は山葵を少量刺身にのせて醤油を浸けて食べるんだ」

「そうなんだ。それじゃあ、はむ」

俺の言った通りに食べるシャル。

「うん、風味があっておいしいね」

どこまで優等生を發揮するんだろう？

その後、鍋の下味について考えながら夕食を済ませた。

「あゝ、いい湯だった」

食後に温泉。男子だから大浴場を使える時間は限られているけど。

脱衣場から一夏の部屋に向かっているとセシリアと出くわした。

「航さん今お戻りですか？」

「そうだが。この後、一夏の部屋に来てくれないか？」

「後で部屋に……？ それは」

いきなり俺の手を握って熱の入った小声でセシリアが答えた。

「はい！ わかりました！ じゅ、準備がありますので少々お時間をいただきますが、必ず！」

そう言っつて、セシリアは走り去った。

それから俺は一端部屋に戻りイカロス達を連れて一夏の部屋を訪れた。

「なんだ一夏だけか」

「おう。お前等はいつも一緒だな」

「ああ、何が起こるかわからないからな」

一夏と話していると部屋の扉が開いた。

「なんだお前等だけか？ 織斑、女の一人も連れ込まんとは詰まらんやつだな」

「だから……はあ、もういいよ。それは」

そういえば、この部屋は『織斑』の部屋だから織斑先生が居てもおかしくないな。

「なあ、千冬姉」

「夏の頭にチヨップが落ちた。」

「織斑先生と呼べ」

「まあ、それはいいじゃん。航達が居るけど、久しぶりに」

「」

「セシリア、何かいいことあったの？」

「いえ、何も」

「……。何もって顔じゃないじゃん」

「あら、そうですね？ うふふ」

「はあ……まあいいわ。あーあ、折角織斑君か山下君と遊ぼうと思っ
て色々用意してきたのに、織斑先生の部屋とその周辺じゃねえ
……」

「あ……。せっしーがえっちい下着つけてる」

「なにっ！？ 脱がせ脱がせえっ！」

「剥けっ。身ぐるみ置いてけっ！」

「きゃあああつ！？ やっ、やめっ……引つ張らないで〜！」

「わ。本当にエロい下着つけてる……」

「なになに、勝負下着？ 山下君のところにいけないのにそんなの着ちゃって」

「まあまあ〜。セシリアったらおませさん」

『セシリアはエロいなあ』

「え、エロくありません！ こ、これは、その、身だしなみ……
そう、身だしなみですわ！」

「そういえばなんか念入りに体を洗ってたわね」

「そのあとシャワーも浴びてたし、今もなんでかメイクしてるし」

「なんか、あやしくない？」

「あ、あ、あやしくなどありませんわ！ これは女として当然の身だしなみ。わたくし、用がありますのでこれで失礼します！」

「うーん、くんくん。セシリアがいつも使ってる香水じゃないよね。えと、この匂いはレリエルのナンバーシックス？ わー。高級品だ〜」

「レリエルのナンバーシックス！？ 一振り十万円って言われる、あの」

「しかも毎年百個しか生産されないシリアルナンバー入りよ、あれ」

「実物持つてるの!? ちょっと見せて!」

「え、ええ、見ても構いませんから、わたくしはこれで」

『ダメ!!!』

「これ、どこで手に入れたの!? お金を出してもそうそう買えないって話じゃない」

「実家の方がレリエル社と懇意にしています……」

「うわ! そういえばセシリアって超お金持ちなんだった!」

「わたくしというか、わたくしの実家ですけれど……」

「匂い嗅がせて!」

「あ、あの、それでしたらこのコロナを使って構いませんから、わたくしはこれで……」

『ダメ!!!』

「勿体無いじゃん!」

「セシリアがつけてるんなら、それ嗅げばOK!」

「ぶっぶっぶっ。逃がしはしないわよ」

「さあ、大人しく嗅がれなさい！」

「い、い、いやああああ〜っ!!」

と、以上のやりとりをアストレアに聞かされた。

「うっ、うっ……酷い目に遭いましたわ……」

結局もみくちやにされたセシリアは、未だに傷跡癒えずの様相で廊下を歩いていた。

(でも、これでやっと)

一夏の部屋へと行ける！ そう思うと、今までの疲れもダメージも吹き飛んだ。乱れた服装も、僅か十数秒で元に戻る。

浮かれているのが歩調にも表れている。今にもスキップをしそうな足取りは、徐々に早足になって目的の場所へと向かった。

ところが。

『……………』

部屋の前、その入り口のドアに張り付いている女子が二名。

「鈴さん？ それに篝さんまで。一体そこで何を」

「シッ!」

鈴がそう言うなりセシリアの口を塞ぐ。

状況が解らずにもがいていると、ふとドアの向こうから声が聞こえた。

『千冬姉、久しぶりだからちよつと緊張してる?』

『そんな訳あるか、馬鹿者。 んっ! す、少しは加減をしろ

……』

『おつ、イカロス。いいぞ、その調子だ』

『マスター、此処はどう?』

『ニンフ、俺の上に乗るな。い、痛いからやめろ』

……………。

「こ、こ、これは、一体、何ですの……?」

口元を震わせ、引きつった笑みを浮かべながら尋ねるセシリア。しかし、返ってきたのは沈黙だけだった。

『じゃあ次は 』

『一夏、少し待て』

部屋の中からの声が途切れ、不思議に思いドアにぴったり耳を寄せた三人が

バンツッ!!

『へぶっ!!』

思いつきり、ドアに殴られた。

「何をしているか、馬鹿者どもが」

「は、はは……」

「こ、こんばんは、織斑先生……」

「さ……さようなら、織斑先生っ!!」

脱兎の如く逃走開始をするが、すぐに捕まった。箒と鈴は首根っこを取られ、セシリアは浴衣の裾を踏まれて終了。

「盗み聞きとは感心しないが、ちょうどいい。入っていけ」

『えっ?』

予想外の言葉に目を丸くする三人。

「ああ、そうだ。他の二人　デュノアとボーデヴィツヒも呼んでいい」

「は、はいっ!!」

開放されたセシリアと鈴は駆け足で二人を呼びに行く。

「箒、遅かったじゃないか。じゃあ始めようぜ」

ベッドを叩いて箒を呼ぶ一夏。

「なっ、織斑先生も居るが……」

「？ 別にいいじゃないか。俺も体が温まってるし、早く始めよう」

「いや、こういうのは、雰囲気……」

「……？」

いまいち箒の言葉の意図が掴めない一夏は不思議そうな顔をするだけで、またベッドを叩いて開始を促す。

困った箒に航が助け舟をだした。

「何してるんだ、箒。早く横になって、一夏にマッサージしても
らえ」

「……えっ、マッサージ……？」

「そうマッサージ。もしかして、一夏から聞いてなかった？」

そう言われて、箒は一夏を睨んだ。

航は航でイカロスにマッサージしてもらいながら、ISのディスプレイを呼び出して調整を行っていた。

「え……きゃあああっ!?!」

箒の悲鳴により航は調整を一時停止した。悲鳴がした方を向くと千冬が箒の浴衣の裾を捲っていた。

「せ、せつ、先生！ 離して下さい!」

真っ赤になって叫ぶと、思いの外あっさり千冬はどいた。

「やれやれ。教師の前で淫行を期待するなよ、十五歳」

「い、い、いつ、インコっ……!?!」

「冗談だ。おい、聞き耳を立ててる四人。そろそろ入ってこい」

『……………』

沈黙が僅かに数秒あって、それからドアがゆっくりと開いた。

立っていたのはシャルロットにセシリアにラウラに鈴。全員が浴衣姿である。

「一夏、マッサージはもういいだろう。ほね、全員好きなところに座れ」

手招きをされて、四人はおずおずと部屋に入る。言われたとおり、

各人が好きな場所に座った。

「イカロスももういいぞ。アストレアとニンフも好きなところに座って」

航に促されて、イカロス達は床に座った。

「ふー。流石に二人連続ですると汗掻くな」

「手を抜かないからだ。少しは要領良くやればいい」

「いや、そりゃ折角時間を割いてくれてる相手に失礼だって」

「愚直だな」

「千冬姉、たまには褒めてくれても罰は当たらないって」

「どうだがな」

楽しそうに会話をする二人を見て、航とエンジニアロイド以外の全員がやっと状況を飲み込む。つまり、今しがた盗み聞きしていた篇の声も、その前の千冬の声も、マッサージをしていただけだということ。

「お、おほほ……はあ」

「ま、まあ、あたしはわかってたけどね」

脱力するセシリアと、妙な強がりを見せる鈴。

そして、何か色々『具体的な』想像をしていたらしいシャルロットとラウラは、真っ赤になって俯いた。

「まあ、お前は航ともう一度風呂にでも行ってこい。部屋を汗臭くさせては困る」

「ん。そうする」

「邪魔者は出て行きますよ」

千冬の言葉に頷いた一夏は、タオルと着替えを持って、航は悪口を叩きながら部屋を出る。

「……………」

どうしていいのかわからない女子が五人、言われたまま座ったところで止まり、エンジェロイドの三人は何か話し合っている。

「おいおい、葬式か通夜か？　いつものバカ騒ぎはどうした」

「い、いえ、その……………」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……………」

「は、初めてですし……………」

「全く、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。篠ノ之、何がいい？」

いきなり名前を呼ばれて、篝はびくつと肩を竦ませる。言葉がす

ぐに出てこず、困ってしまった。

そうこうしていると千冬は旅館の備え付けの冷蔵庫を開け、中から清涼飲料水を八人分取り出していく。

「ほれ。オレンジとスポーツドリンクにコーヒー、紅茶だ。それ
それ他のがいいやつは各人で交換しろ」

そう言われたものの、篤達は渡されたもので満足だったため、交換会はエンジエロイドのみで開かれた。

『い、いただきます』

イカロスとニンフ以外の全員が同じ言葉を口にして、次に飲み物を口にする。

女子の喉がごくりと動いたのを見て、千冬はニヤリと笑った。

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「な、何か入っていましたの!？」

「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちょっとした口封じだ」

そう言って千冬が新たに冷蔵庫から缶ビールを取り出し、蓋を開けて飲み始めた。

「……………」

全員が唾然としている中、千冬は上機嫌な様子でベッドにかける。

「ふむ。本当なら一夏や航に一品作らせるところなんだが……イカロス、何か作ってくれないか？」

「わかりました」

千冬に頼まれたイカロスはその場から立ち去った。

いつもの規則と規律に正しく、全面厳戒態勢の『織斑先生』と目の前の人物とが一致せず、女子全員がまたしてもぽかんとしている。

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらいは飲むさ。

それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

「い、いえ、どういうわけでは……」

「ないですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……？」

ラウラはぽかんと開いた口から何も言葉が出てこない。代わりに、
コーヒーをぐくりと嚥下する。

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

「じゃあ、私は開けてないからマスターに相談しよ」

「むっ、それは困る。なので、しばらく拘束させてもらおう」

ニンフが立ち上がるとすぐに千冬が取り押さえた。何処からか縄を取り出し、ニンフの手足を縛った。

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

二本目のビールをラウラに言って取らせ、また景気のいい音を響かせて千冬が続ける。

「お前等、あいつの何処がいいんだ？」

あいつ、と言っではいるが全員が誰を指しているかわかっていた。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

と、筈はスポーツドリンクを傾けながら。

「あたしは、腐れ縁なただけだし……」

スポーツドリンクのフチをなぞりながら、もごもごと言う鈴。

「ふむ、そうか。ではそつ一夏に伝えておこう」

しれっとそんなことを言う千冬に、二人は一斉に詰め寄った。

『言わなくていいです!』

その様子を笑い声で一蹴して、千冬はまた缶ビールを傾ける。

「わ、わたくしは理想の強さに惹かれて」

セシリアはどこか思い浸りながら。

「僕　あの、私は……優しいところ、です……」

ぼつりとそう言ったのはシャルロットで、声の小ささとは裏腹にそこには真摯な響きがあった。

「ほう。しかしなあ、航は誰にでも優しいぞ」

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなあ」

あははと照れ笑いをしながら、熱くなった頬をぱたぱたと扇ぐシャルロット。

「で、お前は？」

先程から一言も発していないラウラに、千冬が話を振る。ラウラは身をすくませながらも言葉を紡ぎ始めた。

「つ、強いところが、でしょうか……」

「ふむ、確かに航は強いな。それもお前等より頭一つずば抜けているな」

そう言って千冬は、二本目のビールを空ける。

「まあ、強いかはともかく、あいつらは役に立つぞ。家事や料理は上手いし、片方はマッサージも上手く、もう片方は万能な人材がいるからな」

千冬が一夏や航とその家族のことを自慢げに言う。

「というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

『く、くれるんですか？』

「やるかバカ」

『ええ〜』

と声に出して突っ込む女子一同。

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども。あと、航は好きにしろ」

イカロスが一品作ってきたところで、三本目のビールを口にすると千冬は、楽しそうな表情でそう言った。

第一四話 第四世代型IS 紅椿

合宿二日目。今日は午前中から夜まで丸一日ISの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。特に専用機持ちは大量の装備が待っているので大変みたいだ。

「ようやく全員集まったか。おい、遅刻者」

「は、はいっ」

織斑先生に呼ばれて身をすくませたのは、ラウラで集合時間に五分遅れてやってきた。

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみる」

「は、はい。ISのコアはそれぞれ」

俺のISで一夏達に見せてないのはナドレのみか。まずヴァーチエの時パージする必要ないから今まで忘れていたな。

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやるっ」

そう言われて、息を吐くラウラ。

しまった。考え事をして聞いてなかった。話を聞いてなかった。たぶん、聞いてなくても大丈夫だろう。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はい、と一同が返事をする。流石に一学年全員がずらりと並んでいるので、いつもより声が大きく聞こえる。

俺はすぐにキュリオスを展開してワンオフのTRANS - AMを起動させる。

俺の目的はTRANS - AMがいつまで発動し続けるかを試すことである。ぶっちゃけイカロス達は旅館に居るので暇になった。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

打鉄用の装備を運んでいた筈は、織斑先生に呼ばれてそちらへと向かった。

「お前には今日から専用」

「ちーちゃ~~~~~ん!!!!」

砂煙を上げながら人影が走ってくる。

「……………束」

関係者以外立ち入り禁止なのにウサミミに青と白のワンピースを着た束と言う人が乱入してきた。

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめ ぶへっ」

飛びかかってきた束さんを織斑先生が片手で顔面を掴んだ。

「五月蠅いぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

そう言っただ束さんは拘束から抜け出し、箒の方を向いた。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、箒ちゃん。特におっぱいが」

「がんっ！」

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……。し、しかも木刀で叩いた！ 酷い！ 箒ちゃん酷い！」

頭を押さえながら涙目になる束さん。……それと箒、どこから木刀を取り出したんだ。

「え、えつと、この合宿では関係者以外」

「んん？ 珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にはいないよ」

「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……」

山田先生が見事に轟沈した。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

そう言ってくるりと回る。この人がISの開発者にして天才科学者の篠ノ之束なのか。イメージではもう少しまともだと思っていたが、ここまで人が嫌いとは思わなかった。

「はあ……。もう少しまともにできんのか、お前は。そら一年、手が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続ける」

「こいつは酷いなあ、らぶりい束さんと呼んでいいよ?」

「うるさい、黙れ」

旧知の間柄である二人のやりとりに、筈が割り込んだ。

「それで、頼んでおいたものは……?」

やや躊躇いがちに筈が尋ねる。それを聞いて束さんの目が光った。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ!」

びしつと直上を指さす束さん。その言葉に従ってその場にいる人も空を見上げる。

ズズーンッ！

「うわっ!?!」

俺は一夏をGNシールド・クローモードで掴み、金属の塊から引き離れた。旧知の間柄である二人のやりとりに、筈が割り込んだ。

「それで、頼んでおいたものは……?」

やや躊躇いがちに筈が尋ねる。それを聞いて束さんの目が光った。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ!」

びしつと直上を指さす束さん。その言葉に従ってその場にいる人も空を見上げる。

ズズーンッ！

「うわっ!?!」

俺は一夏をGNシールド・クローモードで掴み、落下してきた金属の塊から引き離れた。

一夏を金属の塊から引き離れた直後にTRANS-AMが切れたため、発動時間はおよそ十分だということが分かった。

「じゃじゃーん！ これぞ篝ちゃん専用機こと『紅椿』！ 全スベックが現行ISを殆ど上回る束さんお手製ISだよ！」

銀色の塊から出てきたのは、真紅の装甲に身を包んだ機体だった。

「さあ！ 篝ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！ 私が補佐するからすぐに終わるよん」

「……それでは、頼みます」

「堅いよ。実の姉妹なんだし、こつもつとキャッチーな呼び方で」

「早く、始めましょう」

篝は束さんの言葉を取り合わずに行動を促した。

「ん。まあ、そうだね。じゃあ始めようか」

束さんがリモコンのボタンを押すと紅椿の装甲が割れ、操縦者を受け入れる状態に移った。

「篝ちゃんのデータはある程度先行していれてあるから、あとは最新データに更新するだけだね。さて、ぴ、ぽ、ぱ」

束さんはコンソールを開いて指を滑らせる。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。あとは自動支援装備もつけておいたからね！ お姉ちゃんが！」

「それは、どうも」

相変わらず箸の態度は素っ気ない。

「ん〜、ふ、ふ、ふふ〜 箸ちゃん、また剣の腕前があがったねえ。筋肉の付き方を見ればわかるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなあ」

「……………」

「えへへ、無視されちった。 はい、フィッティング終了。超速いね。流石私」

無駄話をしながらも東さんの手は休むことなく動き続けている。

そしてそれもすぐに終わって、東さんは並んだディスプレイを閉じていく。

「あとは自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いっくん、白式見せて。東さんは興味津津なのだよ」

「え、あ。はい」

全部のディスプレイとキーボードを片付けて、東さんが一夏の方を向く。

一夏は右腕のガントレットに左手を添えると、強い光を放った。

「データ見せてね〜。うりゃ」

言うなり、白式の装甲に東さんがコードを刺した。すると、さっきと同じようにディスプレイが空中へと浮かび上がる。

「ん〜……不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんだろう？ 見たことないパターン。いっくんが男の子だからかな？」

フラグメントマップとは、各ISがパーソナライズにより独自に発展していく道筋のことで、人間で言うと遺伝子に当たる。

「東さん、そのことなんだけど、どうして男の俺がISを使えるんですか？」

「ん？ ん〜……どうしてだろうね。私にもさっぱりだよ。ナノ単位まで分解すればわかる気がするんだけど、していい？」

「いい訳ないでしょ……」

「にやはは、そう言つと思つたよん。んー、まあ、わかんないならわかんないでいいけどねー。そもそもISって自己進化するように作つたし、こういうこともあるよ。あっはっはっ」

「ちなみに、後付装備ができないのはなんでですか？」

「そりゃ、私がそう設定したからだよん」

「え……ええっ！？ 白式って東さんが作つたんですか！？」

「うん、そーだよ。っていつても欠陥機としてポイされてたのを貰って動くように弄つただけだけだねー。でもそのおかげで第一形

態から単一仕様能力が使えるでしょ？ 超便利、やったぜブイ。でねー、なんかねー、元々そういう機体らしいよ？ 日本が開発したのは」

「馬鹿たれ。機密事項をべらべらバラすな」

べしん！ と手加減なしの打撃が束さんの頭にヒットした。もちろん、手を出したのは織斑先生だった。

「いたた。は、ちーちゃんの愛情表現は今も昔も過激だね」

「やかましい」

さらにもう一発べしん！ と追加された。

「こっちはまだ終わらないのですか？」

「んー、もう終わるよー。はい三分経った。あ、今の時間でカップリメンができたね、惜しい」

別に惜しくないと思うが……。

「んじゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。篝ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

音を立てて紅椿に連結されたケーブル類が外れていく。篝が意識を集中させると、次の瞬間に紅椿はもの凄い速度で飛翔した。

急加速の余波で発生した衝撃波に砂が舞い上がる。

「どうどう？ 篝ちゃんが思った以上に動くでしょ？」

「え、ええ、まあ……」

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『雨月』で左のが『空裂』ね。武器特性のデータ送るよん」

そう言って束さんは空中に指を躍らせる。

おそらく紅椿はエクシアと機動性は同等だろう。ヴァーチェでは完全に不利になる。模擬戦するときは注意するべきだな。

「たっ、た、大変です！ お、おお、織斑先生っ！」

いきなり山田先生の声に、俺は思考を中断する。

「どうした？」

「こ、こっ、これをっ！」

渡された小型端末の、その画面を見て織斑先生の表情が曇る。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼動をしていた」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒達に聞こえる」

「す、すみませんっ……………」

「専用機持ちは？」

「ひ、一人欠席していますが、それ以外は」

なにやら、織斑先生と山田先生は小さな声でやりとりをしている。

「そ、そ、それでは、私は他の先生達にも連絡してきますのでっ」

「了解した。 全員、注目！」

山田先生が走り去った後、織斑先生は手を叩いて生徒全員を振り向かせる。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え……………」

「ちゅ、中止？ なんで？ 特殊任務行動って……………」

「状況が全然解んないけど……………」

不測の事態に、女子一同はざわざわと騒がしくなるが、織斑先生が一喝した。

「とつとと戻れ！ 以後、許可無く室外に出た者は我々で身柄を拘束する！ いいな！！！」

『はっ、はいっ!』

全員が慌てて動き始める。

「専用機持ちは全員集合しろ! 織斑、山下、オルコット、デュ
ノア、鳳、ボーデヴィツヒ! それと、篠ノ之も来い!」

「はい!」

妙に気合の入った返事をしたのは、一夏の隣に降りてきた篤だっ
た。

しかし、俺はそんな篤に不安を感じていた。

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間では、俺達
専用機持ち全員とエンジェロイドの三人、教師陣が集められた。

照明を落とした薄暗い室内に、大型の空中投影ディスプレイが浮
かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル
共同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスヘルが制御下を離れて暴
走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

一夏が理解できず、周囲を見ていた。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

織斑先生が淡々と続ける。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらおう」

俺達で止めろという訳か。

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」

「はい。目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

代表候補生の面々と教師陣は開示されたデータを元に相談を始める。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だね。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴアイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルも判らん。偵察は行えないのですか？」

攻撃と機動が特化した機体か。まるでエクシアの射撃版みたいだ。

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろっ」

「いえ、そうとも限りません」

「どういうことだ？」

織斑先生が俺に訊ねた。

「イカロスとアストレアなら可能です。イカロスは福音の最高速度の十倍以上、アストレアはエンジェロイドの中で最速なのでこの任務には適任かと」

それを聞いて全員が驚愕した。

「福音の十倍以上の速度って……」

「なんというか……」

「デタラメだな……」

まあそうだろうけど。本気で戦ったら、俺でも勝てないし。

「だが、アストレアにも欠点があり、距離を取られると何も出来なくなる。確実に決めるなら、一撃必殺の攻撃力を持った機体をぶつけるしかない」

俺の言葉に、全員が一夏の方を向く。

「え……?」

「一夏、あなたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけない。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちよっ、ちよっと待ってくれ！ お、俺が行くのか!？」

『当然』

五人の声が重なった。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない」

「やります。俺が、やってみます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

「俺のキュリオスもです。可変後にブースターを展開して、ワンオフを使用すれば、より速くなります」

「オルコットと山下、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二〇時間です」

「俺は五〇時間です」

「ふむ……。それならば山下が適任」

「待った待った。その作戦はちょっと待ったなんだよ！」

いきなり底抜けに明るい声が遮り、その発生源は天井からだった。全員が見上げると、部屋のご真ん中の天井から束さんの首が逆さに生えていた。

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ!? は、はいつ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

「とっつ」

空中で一回転して着地した。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリティング!」

「……出て行け」

「聞いて聞いて! ここは断・然! 紅椿の出番なんだよっ!」

「なに?」

「紅椿のスペックデータ見てみて! パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ!」

東さんの言葉に応えるように数枚のディスプレイが織斑先生を囲むようにして現れる。

「紅椿の展開装甲を調節して、ほいほいほいと。ホラ! これでスピードはばっちり!」

展開装甲って一夏の雪片と同じものか?

「展開装甲というのはだね、この天才の東さんが作った第四世代型ISの装備なんだよ!。具体的には白式の《雪片式型》に使用されてまーす。試しに私が突っ込んだ」

『え！？』

この言葉には、俺と一夏以外の専用機持ちも驚いていた。

「それで、上手くいったのでなんと紅椿は全身のアーマーを展開装甲にしてあります。システム最大稼動時にはスペックデータはさらに倍ブッシュだ」

「ちよつ、ちよつと、ちよつと待ってください。え？ 全身？ 全身が、雪片式型と同じ？ それって……」

「うん、無茶苦茶強いね。粒子を放出するISと同じくらい強いね」

俺と織斑先生とイカロス以外の全員がぼかんとしている。

「ちなみに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標である即時万能対応機つてやつだね。にはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい」

場の一同は静まりかえって言葉もない。

「はにゃ？ あれ？ 何でみんなお通夜みたいな顔してるの？ 誰か死んだ？ 変なの」

変なの、どこの話ではない。各国が資金、時間、人材の全てをつぎ込んで競っている第三世代型ISの開発が無意味になるのだから。

「東、言ったはずだぞ。やりすぎるな、と」

「そうだったけ？ えへへ、つつい熱中しちゃったんだよ」

織斑先生に言われて漸く、東さんは俺達が黙り込んでいる理由を理解したようだ。

「話を戻すぞ。……東、紅椿の調整にはどれくらいの時間がかかる？」

「お、織斑先生！？」

驚いた声をあげたのはセシリアだった。

「わ、わたくしとブルー・ティアーズなら必ず成功してみせますわ！」

「そのパッケージは量子変換してあるのか？」

「そ、それは……まだですが……」

痛いところを突かれたのか、勢いを失って小声になってしまっセシリア。

「山下、お前はどつなんだ？」

「既に完了しています」

俺はそう答えた。実際はキュリオスの武装の一部なので追加で量子変換する必要はない。

「ちなみに紅椿の調整時間は七分あれば余裕だね」

「よし。では本作戦では織斑・篠ノ之・山下とイカロス、アストレアによる目標の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は三〇分後。各員、ただちに準備にかかれ」

ぱん、と織斑先生が手を叩く。それを皮切りに教師陣はバツクアツプに必要な機材の設営を始めた。

俺は部屋に戻り、左腕だけISを部分展開してコードを三つ繋いで、イカロス達の首輪にそれぞれ繋いだ。

「マスター、今から何をするのでですか？」

「三人にはオープン・チャネルとプライベート・チャネルをインストールする。ただし、GNDドライヴを持たないISと通信出来ないが、俺となら離れていても通信が可能になるから」

イカロスの質問に作業をしながら答える。

十分後、オープン・チャネルとプライベート・チャネルのインストールが終了した。

更に十分かけて、それぞれのチャネルの使い方を教え、使いこなせるようにした。

第一五話 銀の福音とセカンド・シフト

時刻は十一時半。砂浜で俺と一夏、箒、アストレア、イカロスは少し距離を置いて並んで立っている。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

「起動、GUNDAM。モード、キュリオス」

全身が光に包まれ、ISアーマーが構成される。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

作戦上、俺の場合変形しないと最高速度を出せないのも、一夏を福音まで運ぶのは箒になっている。

イカロスとアストレアには先行して足止めするように指示して向かわせた。

『織斑、山下、篠ノ之、聞こえるか？』

ISのオープン・チャンネルから織斑先生の声が聞こえる。

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がける』

「了解」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

『そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るとも限らない』

「わかりました。出来る範囲で支援をします」

「それと山下には現場での指揮権を与える。二人とも指示に従うように」

『はい』

幕の落ち着いた返事のようにだが口調は弾んでいて、浮ついた印象を受けた。

『織斑、山下』

「は、はい」

「なんですか？」

オープン・チャネルではなく、プライベート・チャネルから織斑先生の声が届いた。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態では何かを損じ

るやもしれん。いざというときはサポートしてやれ』

「わかりました。ちゃんと意識しておきます」

「肝に銘じておきます」

『頼むぞ』

織斑先生の声が再びオープンに切り替わり、号令をかけた。

『では、始め!』

作戦、開始。

箒は一夏を背に乗せたまま、一気に上空三百メートルまで飛翔し、俺は戦闘機形態に変形してテールブースターを展開、そのまま後を追う。

箒が紅椿を加速させると、俺もGNバーニアに蓄えているGN粒子を一気に開放する。

「見えたぞ、一夏!」

「!?!」

福音がその場に停止していた。どうやらイカロスが、絶対防御圏『イージス』で閉じ込めているようだ。

俺は福音の近くに居るイカロスとアストレアにオープン・チャネルで指示を出す。

「イカロス、イージスを解除して二人ともその場から離れる」

「了解しました」

「わかった」

イカロスがイージスを解除してアストレアとともに福音から離れると、一夏が零落白夜を発動。それと同時に瞬時加速を行って間合いを詰めた。

零落白夜が福音に触れる、その瞬間に反転して後退の姿となって身構えた。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘》^{シルバー・ベル}、稼動開始」

「!?!」

オープン・チャネルから聞こえたのは抑揚のない機会音声だった。

俺は人型に変形、ISをキュリオスからデュナメスに変更する。

「イカロス、アストレア、箒。一夏の援護をするぞ！」

「任せる！」

「はい、マスター」

「わかった」

一夏は再度福音に斬りかかるが、どれも紙一重で回避され、アス

トレアと箒が同時に斬りかかっても、福音は回避した。

俺はフロントアーマーと膝からGNミサイルを二十基、イカロスは可変ウィングから永久追尾空対空弾『アルテミス』を射出する。

福音は一齐に砲口を開き、光の弾丸を撃ち出した。

GNミサイルとアルテミスは福音の弾丸に撃ち落とされ、残った弾丸は俺達の方に向かってきた。

俺は向かってくる弾丸を出来るだけ回避し、無理な場合は脚部から取り出したGNビームピストルで相殺、イカロスはイージスで防ぎ、アストレアはa e g i s s lで回避できないのを防いでいた。

「一夏は右から、箒は左から、アストレアは上から攻めるんだ！」

「おう！」

「了解した！」

「任せて！」

アストレアと一夏、箒は回避運動を行いながら連射の手を休めない福音へと、三面攻撃を仕掛ける。

けれど、一夏と箒、アストレアの攻撃は掠りもしない。

「一夏！ 私が動きを止める！！！」

「わかった！」

言うなり、箒は二刀流で突撃と斬撃を交互に繰り返す。

紅椿の機動力と展開装甲による自在の方向転換、急加速を使って福音との間合いを詰めていく。この猛攻には、流石の福音も防御を使い始めた。

「La……………」

甲高いマシンボイス。その刹那、ウイングスラスターはその砲門全てを開いた。全方位に向けての一斉射撃。

「やるなっ……………！ だが、押し切る！！」

箒が光弾の雨を紙一重でかわし、迫撃をする。 隙が、できた。

「…」

何故か一夏は福音とは真逆の、直下海面へと向かっていた。

「一夏！？」

「うおおおっ！！」

瞬時加速と零落白夜を行い、一発の光弾に追いついた一夏はそれをかき消した。

よく見ると、海上に一隻の船があった。

「ちっ。 イカロス、あの船にイージスを。 アストレアは俺と

共に無防備になるイカロスを護るぞ。」

『はい、マスター』

イカロスは船にイージスを張り、俺はイカロスに被弾しそうな光弾をGNビームピストルで撃ち、俺が防げなかった光弾をアストレアが対処する。

「何をしている！？ 折角のチャンスに」

「船がいるんだ！ 海上は先生達が封鎖したはずなのに ああくそつ、密漁船か！」

一夏の零落白夜が消えた。即ち、一撃必殺の作戦は失敗に終わった。

「馬鹿者！ 犯罪者などを庇って……。そんな奴等は」

「箒！！」

「ッ　！？」

「箒、そんな　そんな寂しいことは言つな。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……。どうしたんだよ、箒。全然らしくないぜ」

「わ、私、は……」

明らかかな動揺を顔に浮かべ、それを隠すかのように手で覆つ。その時に落とした刀は空中で光の粒子へと消えた。

「箒いいっ！！」

一夏は刀を捨てて箒に向かった。

視線の先では福音が再び一斉射撃モードへと入っていた。しかも、今度は箒に照準を絞っている。

今から瞬時加速やイカロスにイージスを展開してもらっても間に合わない。

「ぐあああっ！！」

次の瞬間、一夏が福音と箒の間に割って入り、庇うように抱きしめた瞬間に、光弾が一斉に背中に降り注いだ。

「一夏っ、一夏っ、一夏あっ！！」

「う……あ………」

「イカロスは箒を、アストレアは一夏を連れて旅館に戻れ」

「ですが、マスターは？」

「誰かが足止めしないとイケないだろう？ それに二人の方が早く戻る。……それと次の指示があるまで旅館で待機だ」 『はい、マスター』

イカロスは箒を、アストレアは一夏を連れて戦場を離脱した。

俺はデュナメスからエクシアに変更し、TRANS - AMを起動させて一気に接近する。

GNソード・ソードモードで斬りかかるが、やはり先程と同様に避けられる。

「ならばこれでどうだ？」

両肩からGNビームサーベルを取り出し、福音に投擲し、続いて腰部にあるGNビームダガーも投擲する。

しかし、福音も光弾を撃ち出し相殺した。だが、それを上回る数が此方に向かってくるのをGNショットブレイド、GNロングブレイドを投擲して防ぐ。

防いだ爆発により煙が発生し、俺は煙の中に入らずに福音に突撃するが回避され、しかもTRANS - AMが切れてしまった。

福音の方に向いた時には既に一斉射撃モードに移っていた。

俺は咄嗟にGNシールドとGNソードのバツクラーを構え光弾から衝撃を防ぐが、全弾を防げずに十発以上被弾して海に墜落した。

「……………」

旅館の一室。壁の時計は四時前を指している。

ベッドで横たわる一夏は、もう三時間以上も目覚めないままで、航は行方不明である。

『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば召集する。それまで各自現状待機しろ』

イカロスとアストレアに連れられ、旅館に戻った箒を待っていたのはその言葉だった。千冬は一夏の手当を指示して、イカロスとアストレアを連れて作戦室へと向かう。箒は、責められないことが辛かった。

「あー、あー、わかりやすいわねえ」

突然ドアが開き、遠慮無く入ってきたのは鈴だった。

「……………」

「あのさあ。一夏がこうなったのって、あんたのせいなんじゃない?」

ISの操縦者絶対防御、その致命領域対応によって一夏は昏睡状態になっている。

「……………」

「で、落ち込んでますってポーズ? つぎけんじゃないわよ!」

烈火の如く怒りをあらわにした鈴は、うなだれたままだった箒の

胸倉を掴んで無理矢理に立たせる。

「やるべきことがあるでしょうが！ 今！ 戦わなくて、どうすんのよ！」

「わ、私……は、もうISは……使わない……」

「ッ ……！」

頬を打たれ、支えを失った箒は床に倒れる。

そんな箒を再度鈴は締め上げるように振り向かせた。

「甘ったれてんじゃないわよ……。専用機持ちっつーのはね、そんな我儘が許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは」

鈴の瞳が、箒の瞳を直視する。

「戦うべきに戦えない、臆病者か」

その言葉で、箒の闘志に火がついた。

「どうしろと言うんだ！ もう敵の居所もわからない！ 戦えるなら、私だって戦う！」

自分の意志で立ち上がった箒を見て、鈴は溜息をついた。

「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」

「な、なに？」

「場所ならわかるわ。今ラウラが」

言葉の途中でちょうどドアが開く。そこに立っていたのは軍服に身を包んだラウラだった。

「出たぞ。ここから三〇キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」

ブック端末を片手に部屋の中に入ってくるラウラ。

「流石ドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……。お前の方はどうなんだ。準備は出来ているのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

「ああ、それなら」

ラウラがドアの方へ視線をやる。そして、それはすぐに開かれた。

「たった今完了しましたわ」

「準備オツケーだよ。いつでもいける」

今、旅館に居る専用機持ちが全員揃うと、それぞれが箒へと視線を向けた。

「で、あんたはどうするの?」

「私は戦う……戦って、勝つ! 今度こそ、負けはしない!」

「決まりね」

腕を組み、鈴は不敵に笑う。

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に墜とすわ」

「ああ!」

俺は福音と交戦、墜落して近くの岩礁に打ち上げられていた。

ISの状態を見ると、エクシアで頭部と左肩から先の装甲が無くなっていて。唯一の武器であるGNソードの刀身が折れていた。

破損状態を詳しく見ていると気になるログがあった。

経験値が一定量を超えました。これより『第二形態移行』します。

ログを読み終えるとGNフィールドを展開したかのように淡い緑色が俺を包み込んだ。

「……………」

海上二〇〇メートル。そこで静止していた『銀の福音』は、まるで胎児のような格好で蹲っており、膝を抱くように丸めた体を守るように頭部から伸びた翼が包む。

？

不意に、福音が顔を上げる。

次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！」

五キロ離れた場所に浮かんでいるIS『シュヴァルツエア・レーゲン』とラウラは、福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。

（敵機接近まで……四〇〇〇……三〇〇〇　くっ！　予想よりも速い！）

あっという間に距離が一〇〇〇メートルを切り、福音がラウラへと迫る。

「ちいっ！」

砲戦仕様はその反動相殺のために機動との難しいのに対して、機動力に特化した福音は三〇〇メートル地点から急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばす。

「セシリア！」

伸ばした腕が突然上空から垂直に降りてきた機体によって弾かれる。

青一色の機体　ブルーティアーズによるステルスモードからの強襲だった。

『敵機Bを認識。排除行動へと移る』

「遅いよ」

セシリアの射撃を避ける福音を、真後ろから別の機体が襲う。

それは先刻の突撃時にセシリアの背中に乗っていた、ステルスモードのシャルロットだった。

ショットガン二丁による近接射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩したが、それも一瞬のことですぐさま三機目の敵機に対して《銀の鐘》による反撃を開始した。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

シャルロットは実体シールドとエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ。

防御の間もシャルロットは得意の『高速切替』によってアサルトカノン呼び出し、タイミングを計って反撃を開始する。

加えて、高速機動射撃を行うセシリアと、距離を置いての砲撃を再開するラウラ。三方からの射撃に、福音はじわじわと消耗を始める。

『……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

全方向にエネルギー弾を放った福音は、次の瞬間に全スラスタを開いて強行突破を計る。

「させるかあつ!!」

海面が膨れ上がり、爆ぜた。

「離脱する前に叩き落す！」

海面から飛び出してきた紅椿は福音へと突撃する。

その背中から飛び降りた鈴は、戦闘状態に入る。

両肩の衝撃砲が開くのに合わせて、増設された二つの砲口が姿を現し、四門の衝撃砲が一斉に火を噴いた。

『!!』

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一斉に降り注ぐ。

「やりましたの!？」

「まだよ!」

衝撃砲の直撃を受けてなお、福音はその機能を停止させてはいなかった。

『《銀の鐘》最大稼働 開始』

両腕を左右いつぱいに広げ、翼も自身から見て外側へと向け、エネルギー弾の斉射撃が始まった。

「くっ!！」

「箒! 僕の後ろに!」

前回の失敗をふまえて、箒の紅椿は機能限定状態に設定している。

そう設定にしたのは、防御をシャルロットに任せ、集団戦闘の利点を生かした役割分担であった。

「それにしても……これはちょっと、きついね」

防御専用パッケージであっても、福音の異常な連射を立て続けに受けることはやはり危うかった。

そうこうしている間にも物理シールドが一枚、完全に破壊される。

「ラウラ! セシリア! お願い!」

「言われずとも！」

「お任せになって！」

後退するシャルロットと入れ替わりにラウラとセシリアがそれぞれ左右から射撃を始める。

「足が止まればこっちのもんよ！」

直下からの鈴の突撃。双天牙月による残撃のあと、至近距離からの拡散衝撃砲を浴びせる。狙いは、頭部に接続されたマルチスラスター《銀の鐘》。

「もらったあああっ！！」

エネルギー弾を全身に浴びながら、鈴の斬撃は止まらず、拡散衝撃砲の弾雨を降らせ、互いにダメージを受けながら、斬撃が福音の片翼を奪った。

「はっ、はっ……！ どうよ　ぐっ！？」

片側だけの翼になりながら、それでも福音は一度崩した姿勢をすぐに建て直し、鈴の左腕へと回し蹴りを叩き込み、一撃で腕部アーマーを破壊し、海へと墜とす。

「鈴！　おのれっ　！！」

箒は両手に刀を持ち、福音へ斬りかかる。

福音の右肩に刃が食い込んだが、左右両方の刃を手のひらで握りしめる。

「なっ!?!」

刀身から放出されるエネルギーに装甲が焼き切れるが、お構いなしに福音は両腕を最大まで広げ、残った翼が砲口を開放して待っていた。

「箒! 武器を捨てて緊急回避をしろ!」

しかし、箒は武器を手放さない。

エネルギー弾がチャージされ、一斉に放たれた。

エネルギー弾が触れる寸前、紅椿は一回転をする。その瞬間、爪先の展開装甲が箒の意志に因應するように開き、エネルギー刃を発生させる。

「たああああっ!!!」

踵落としのような格好で、エネルギー刃の斬撃が決まり、両方の翼を失った福音は、崩れるように海面へと墜ちていった。

「はっ、はあっ、はあっ……!!」

「無事か!?!」

「私は……大丈夫だ。それより福音は」

突然、海面が強烈な光の珠によって吹き飛び、球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているように凹んだままだった。その中心に、青い雷を纏った『銀の福音』が自らを抱くかのように蹲っている。

「これは…!?! 一体、何が起きているんだ…?!?」

「!?!? まずい! これは何の『第二形態移行』だ!」

ラウラが叫んだ瞬間、その声に反応したかのように福音が顔を向ける。

無機質なバイザーに覆われた顔からは何の表情も読み取れないが、確かな敵意を感じて、各I.Sは操縦者へと警鐘を鳴らす。

しかし 遅かった。

『キアアアアアア…!!』

獣の咆哮のような声を発し、福音はラウラへと飛びかかる。

「なにっ!?!?」

あまりに速いその動きに反応できず、ラウラは足を掴まれる。

そして、切断された頭部から、エネルギーの翼が生えた。

「ラウラを離せえっ!」

シャルロットは武装を切り替えて近接ブレードによる突撃を行う

が、空いた方の手で受け止められて止まった。

「よせ！ 逃げる！ こいつは」

その言葉は最後まで続かず、ラウラは眩いほどの輝きと美しさを併せ持ったエネルギーの翼に抱かれるが、二本のビームが福音に中り、ラウラは開放された。

全員がビームが飛んできた方を向くと一機の青と白のISが向かって来た。

特徴的なのはGNドライブが両肩に付いており、武装は以前のISより少なくなっている。

「ダブルオー、目標を駆逐する！」

そう言って航は福音に突撃する。

福音はエネルギー弾を撃ち出し、接近されないようにする。

「無駄だ！」

航は、GNドライブを前方にし、GNフィールドを展開する。

『敵機の情報を更新。優先順位を変更。障害にならない者を最優先に』

福音がエネルギー弾雨を放ち、ラウラ、シャルロット、セシリアを撃墜させた。

「私の仲間を　よくも！」

急加速によって接近した箒は、続けざまに斬撃を放ち続ける。

「うおおおおっ！！！」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。徐々に出力を上げていく紅椿に、僅かに福音が押され始める。

必殺の確信を持って、雨月を放つ。しかし

「なっ！　また、エネルギー切れたと！？　ぐあっ！」

その隙を見逃さず、福音の右腕が箒の首を捕まえる。

そして、ゆっくりと翼が箒を包み込んでいった。

「ぐっ、ぐっ……！！！」

ぎりぎり締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる。

福音の手は硬く箒の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へと進化した『銀の鐘』が紅椿の全身を包んでいた。

航は射線上に箒が居るため、迂闊に攻撃が出来ないでいた。

「いち、か……」

知らず知らず、その口からは一夏の名前を呼ぶ声が出ていた。

「一夏……」

さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めて瞼を閉じる。

イイイインツ……！！

『!?!?』

突然、福音は箒を掴んでいた手を離す。

いきなりの出来事に混乱している箒が、瞳を開けた時に見たのは強烈な荷電粒子砲による狙撃を受けて吹き飛ぶ福音に航がGNソード?・ビームサーベルで斬りかかる姿だった。

戸惑う箒の耳に届いたのは、さっきからずっと願い思っ止まない声だった。

「俺の仲間、誰一人としてやらせねえ!」

箒の視線の先には、白く、輝きを放つ機体がある。

「あ……あ、あっ……」

目尻に涙が浮かび、僅かに潤んだ視界に見えるのは、白式第二形態・雪羅を纏った一夏だった。

「一夏っ、一夏なのだな!? 体は、傷はっ…………!」

一夏は、慌てて声を詰まらせる箒の元へ飛んで答える。

「おう。待たせたな」

「よかつ…………よかつた…………本当に…………」

「なんだよ、泣いてるのか?」

「な、泣いてなどいないっ!」

目を拭う箒に、一夏は優しく頭を撫でる。

「心配掛けたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなごっ…………」

「ちょうどよかつたかもな。これ、やるよ」

「え…………?」

一夏は持ってきたものを箒に渡す。

「り、リボン…………?」

「誕生日、おめでとうな」

「あつ……」

「それ、折角だし使えよ」

「あ、ああ……」

「おい、いつまで話ししている。戦闘中だぞ」

「悪い。今行く」

言うなり、一夏は福音と戦っている航の方に向かう。

「再戦と行くか！」

航はGNソード・ライフルモードで牽制しながら、福音との間合いを詰める。

「逃がさねえ！」

一夏の左手のクローが福音の装甲を斬る。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対処する』

エネルギー翼を大きく広げ、胴体から生えた翼を伸ばす。そして次の回避の後、福音の掃射反撃が始まった。

「そう何度も食らうかよ！」

「GNフィールド！」

一夏は左手を前に突き出し、変形させる。光の膜が広がり、福音の弾雨を消していく。

航はGNフィールドを展開して福音の弾雨を凌ぐ。

「うおおおっ！」

一夏は二段階瞬時加速を行い、福音の後を追いかける。

『状況変化。最大攻撃力を使用する』

福音の機械音声が告げると、翼を自身へと巻き付けはじめる。それは球状になって、エネルギーの繭にくるまれた状態へと変わった。

翼が回転しながら一斉に開き、全方位に対してエネルギーの弾雨を降らせる。

一夏は仲間の盾になろうとするが、それを怒鳴り声に蹴飛ばされた。

「何やってんのよ！ あたし達は腐っても代表候補生よ？ 余計な心配してないで、さっさと片付けちゃいなさいよ！！」

「鈴………わかった！」

「援護は任せろ！」

「ああ。頼むぜ、航」

一夏と航は再度福音に向かって行く。

「ぜらあああっ！！」

零落白夜の光刃がエネルギー翼を断つが、両方の翼を斬るのは無理みたいで、福音に二撃目を回避される。そうしている間に失った翼は再構築して、連続射撃を行う。

「くっ！」

「下がれ、一夏！」

航はGNフィールドを展開して一夏の前に出て攻撃を防ぐ。

「一夏！」

「箒！？ お前、ダメージは」

「大丈夫だ！ それよりも、これを受け取れ！」

紅椿の手が、白式に触れる。

「な、なんだ……？ エネルギーが 回復！？ 箒、これは

」

「今は考えるな！ ほら、航も！」

「俺は必要ない。さっさと終わらせるぞ」

「おう！」

一夏は雪片式型を最大出力まで高める。

「うおおおっ！」

福音は一夏の横薙ぎを縦軸一回転して回避、一夏を再び視界に捉えると同時に光の翼を向ける。

「航！ 箒！」

「おう！」

「任せろ！」

一夏の方に向けられた翼を、紅椿の二刀の斬撃で断ち切り、ダブルオーのGNソード？でもう片方の翼を切裂く。

「一夏！ 俺の後に続け！」

「わかった！」

最後の一突きを繰り出そうとする一夏に、福音は体から生えた翼全てで一斉射撃に航がGNフィールドで防ぎながら突撃し、一夏はその後ろに続く。

航は福音の目の前にきたところで、福音の後ろに回り込んで腕を

捕まえ、一夏は福音の胴体へと零落白夜の刃を突き立てた。

そして数十秒後、福音は機能を停止した。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

「やっと終わったー」

そう言って航は、操縦者を抱え直した。

「終わったな」

「ああ……。やっと、な」

一夏と篤は肩を並べて、空を見る。

青かった空はすでに、赤くなっていた。

第一六話 福音戦後と臨海学校最終日

「作戦完了　　と言いたるところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰つたらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいる」

「……はい」

戦士達の帰還は、冷たいものだった。

腕組みで待つていた織斑先生に一夏達はきつく言われ、今は大広間で俺以外の専用機持ちは全員正座をしており、俺はイカロスとアストレアに腕を取られ、ニンフに後ろから抱きつかれている。

なんでも心配を掛けた罰らしい。……シャルとセシリアとラウラの視線が痛い。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……。け、怪我人も居ますし、ね？」

「ふん……」

怒り心頭の織斑先生に対して、山田先生は先程から救急箱を持ってきたり、水分補給パックを持ってきたりしている。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。あつ！　だ、男女別ですよ！　わかってますか、織斑君、山下君！？」

言われなくてもわかってますよ、山田先生？

「それじゃ、皆さんまずは水分補給をしてください。夏はそのあたりも意識しないと、急に気分が悪くなったりしますよ」

返事をして、俺達はそれぞれスポーツドリンクのパックを受け取る。

「……………」

「な、なんですか？ 織斑先生」

じつとこつちを睨んでいたので、一夏は口を開いた。

「……………しかしまあ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」

「え？ あ……………」

なんだか照れくさそうな顔をしていたが、すぐに背中を向けられた。

『……………』

「さっさと退散するぞ、一夏」

「ぐえっ！」

俺は女子に何かを言われる前に、一夏の後ろ襟を掴んで廊下に出た。

「ね、ね、結局なんだったの？ 教えてよ」

「……ダメ。機密だから」

俺の隣で夕飯を食べるシャルに、一年女子が数名群がってあれこれ訊いている。おそらく一番取つきやすいシャルになら訊けると思っただろうが、それは大きな間違いだ。シャルは専用機持ちの中では一番責任感が強い。

「ちえ〜。シャルロットってばお堅いなあ」

「あのねえ、聞いたら制約つくんだよ？ いいの？」

「あー……それは困るなあ」

「だったら、はい。この話はこれでおしまい。もう何も答えないよ」

「ぶーぶー」

同年代の女子を軽くあしらうシャル。

夕飯は美味かったが、一夏に声を掛けられた筈が少し変わった。

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても四五パーセントかあ。まあ、こんなところかな？」

空中投影のディスプレイに浮かび上がった各種パラメーターを眺めながら、その束は無邪気に微笑む。

「それよりもわかんないなあ。謎の粒子を出すISに翼を持つ女性。全く興味が尽きないや」

もう一つのディスプレイには航のISとイカロス、アストレアの戦闘シーンだった。

「んー……ん、ん」

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを呼び出す。そこでは白式第二形態の戦闘シーンが流れていた。

「は。それにしても白式には驚くなあ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで」

「まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー〇〇一にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

森から音もなく千冬が姿を現す。

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

二人は互いの方を向かない。背中を向けたまま、束はさつきまでと同じように足を揺らし、千冬は身を木に預ける。

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行ったんでしようか？」

「……白式を『しろしき』と呼ばば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぼーん。流石はちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけのことはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、そのコアを残して解体され、第一世代作成に大きく貢献した。そしてそのコアは、とある研究所襲撃事件を境に行方がわからなくなり、いつしか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた。

「それで、例えばの話、コア・ネットワークで情報をやりとりしていたとするよね。ちーちゃんの一番最初の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』が。そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティを開発したとしても、不思議じゃないよねえ」

「……………」

千冬は、答えない。

「それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、なんでなんだろうねー。私がしたから、確実にあのコアは初期化されたはずなんだけどね」

「不思議なこともあるのだな」

確かにそれについては、解らないというのが本当のところである。

「……そうだな。私も一つ例え話をしてやるう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ」

「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることができるとする。そこで使われるISを、その時だけ動けるようにする。そうすると、本来男が使えないはずのISが使える、ということになるな」

「ん〜？ でも、それだと継続的に動かないよねえ」

「そうだな。お前は、そこまで長い間同じものに手を加えることはしないからな」

「えへへ。飽きるからね」

「……で、どうなんだ？ とある天才」

「どうなんだろうねー。実のところ、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねえ。いっくんはIS開発に関わってないはずなのにね」

「ふん……。まあいい。次の例え話だ」

「多いねえ」

「嬉しいだろう?」

「違うね、と返して束は千冬の話に耳を傾ける。

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのISの暴走事件だ」

束は答えない。そして、千冬は言葉を続ける。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」

「へえ、不思議な例え話だねえ。すごい天才が居たものだ。嘗て、十二カ国の軍事コンピューターを同時にハッキングするという歴史的な大事件を自作した、天才がな」

束は答えない。千冬も、もう言葉を続けない。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい?」

「そこそこにな」

「そうなんだ」

「それと粒子を放出するISの操縦者からの伝言だ。『俺の身内に手を出すと容赦しない』だそうだ。全く、教師を何だと思っているんだ」

「ねえ、その操縦者の名前は?」

「山下航だ」

「ふーん。山下航ね」

岬に吹き上げる風が、一度強くつねりを上げた。

「」

その風の中、何かを呟いて……東は消えた。

「……………」

千冬は息を吐き出して、後頭部を押しつけるように木に寄りかか
る。

翌朝。朝食を終えて、すぐにIS及び専用装備の撤収作業に当た
る。

そうこうして十時を過ぎたところで作業は終了。全員がクラス別
のバスに乗り込む。昼食は、帰り道のサービスエリアで取るみたい
だ。

「あ……………」

座席にかけた今の一夏の状況は、一言でいうとボロボロだ。

なんでも、昨日は一時間近く追い回されたあげく、旅館を抜け出したのがばれて織斑先生に大目玉だったらしい。

「すまん……誰か、飲み物持ってないか……？」

あまりにもしんどそうに訊かれるが、誰も答えない。

一夏は最後の望みを託して箒へと視線を向けた。

「なっ……何を见ているか！」

箒は顔が赤くなったかと思ったら、一夏にチョップを出した。

「ふ、ふんっ……！」

どうやら箒も飲み物をあげないみたいだ。

「うー……しんど……」

「い、一夏っ」

「はい？」

箒に呼ばれて一夏が振り向いたら、車内に見知らぬ女性が入ってきた。

「ねえ、織斑一夏さんと山下航くんって居るかしら？」

「あ、はい。俺が織斑ですけど」

一夏は呼ばれたまま、素直に返事をし、俺は視線を女性に向けた。

「君達がそうなんだ。へえ」

女性はそう言うと、俺と一夏を興味深そうに眺める。品定めをしているわけではなく、純粋に好奇心で観察しているようだ。

「あ、あの、あなたは……？」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「え」

予想外の言葉に一夏が困惑していると、一夏の頬に唇が触れた。

「ちゅっ……。これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」

「え、あ、う……？」

一夏にキスした後、俺の方にナターシャさんがやってきた。

「キスは結構なんでお引き取り下さい」

「そう……。じゃあ、はい。私の携帯のアドレス。よかったら連絡頂戴ね。青いナイトさん」

「は、はあ……」

そう言っただターシャさんは、俺に携帯のアドレスが書かれたメモを渡してきた。

「じゃあ、またね。バイ」

「は、はあ……」

ひらひらと手を振ってバスから降りるナターシャさんを、一夏はぼーっとしたまま、俺は困惑気味に手を振り返して見送る。

その後、一夏は箒にペットボトルを投げつけられた。

「……………」

バスから降りたナターシャは、目的の人物を見つけてそちらへと向かう。

「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ。ガキの相手は大変なんだ」

そう言ってきたのは、千冬だった。

ナターシャは、その言葉に少しだけにはかんで見せる。

「思っていたよりもずつと素敵な男性達だったから、つい」

「やれやれ……。それより、昨日の今日でもう動いて平気なのか？」

「ええ、それは問題なく。私は、あの子に守られていましたから」

「やはり、そうなのか？」

「ええ。あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンド・シフト、それにコア・ネットワークの切断……。あの子は私のために、自分の世界を捨てた」

言葉を続けるナターシャは、さっきまでの陽気な雰囲気など微塵も残さず、その体に鋭い気配を纏う。

「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのISを敵に見せかけた元凶を必ず追って、報いを受けさせる」

福音は、コアこそ無事だったが、暴走事故を招いたことから今日未明に凍結処理が決定された。

「……何よりも飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた。相手が何であろうと、私は許しはしない」

「あまり無茶なことはするなよ。この後も、査問委員会があるんだろう？ 暫くはおとなしくしておいたほうがいい」

「それは忠告ですか、ブリュンヒルデ」

IS世界大会『モンド・グロツソ』、その総合優勝者に授けられる最強の称号・ブリュンヒルデ。

千冬はその第一回受賞者であったが、正直その名前で呼ばれることは好きではない。

「アドバイスさ。ただのな」

「そうですか。それでは、おとなしくしていきましょう。……暫くは、ね」

一度だけ鋭い視線を交わしあった二人は、それ以上の言葉なく互いの帰路に就く……はずだった。

「言い忘れていたけど。山下くんを気に入っちゃったから彼に伝えておいてね」

「……………」

その言葉を残してナターシャは、本当に帰路に就いた。

「全く。あいつはいくつフラグを立てれば気が済むんだ」

そう呟いて千冬は、バスに戻った。

設定

主人公 山下航

恋姫の世界から戻ってきた人物。恋姫の世界で楽進と周泰に氣を習いマスターした。ISの世界でも一応氣を使うことができる。身体能力は恋姫の呂布よりも上。

専用機 『GUNDAM』

ダイダロスに頼んで、貰ったIS。トレミーに配属された機体を一纏めにし、状況に応じて変更することができる。

武装は原作通りで外伝のものは知らないので使用できない。出力は余程のことがない限り半分に抑えている。

初期設定 Oガンダム (実戦配備型)

第一次形態

- ・ガンダムエクシア
- ・ガンダムデュナメス
- ・ガンダムキュリオス
- ・ガンダムヴァーチェノナドレ

第二次形態

- ・ダブルオーガンダム
- ・ケルデイルガンダムGNHW
- ・アリオスガンダムGNHW
- ・セラヴィーガンダムGNHW/セラフィムGNHW

支援機はまだ完成してないため、今はダブルオーとアリオスの本領を發揮することができない。

単一仕様能力 『TRANS-AM』

第一次形態から使用可能。メリットは機体性能を三倍に引き上げる。デメリットは稼動時間は十分しか持たず、使用後は性能が大幅に下がる。

第二次形態はダブルオーを除いて使用後も性能は大幅に下がることはなくなったが、ダブルオーはツインドライブによりシステムが不安定でオーバーロードを起こすため五分しか稼動できない。

第一七話 接触

「でやああああっ!!」

ガギインツ!

と鋭く重い金属音を響かせ、一夏と鈴は刃を交えて対峙する。

九月三日。二学期初の実戦訓練は、一、二組の合同で始まった。

「くっ……!」

「逃がさないわよ、一夏!」

クラス代表者同士ということが始まったバトルは、最初こそ一夏が押していたものの次第に鈴が巻き返し始めていた。

その理由は単純明快。第二形態になった白式の、さらに加速した燃費の悪さである。

「最初にシールドを使いすぎたわね!」

「まだまだあっ!」

そうやって刀を振るう一夏だったが、《雪片式型》は通常の物理刀になっている。

距離が開けば左腕の多機能武装腕《雪羅》による荷電粒子砲を放てるはずだったが、既に、エネルギーが底をついていた。

「無駄よ！ この甲龍は燃費と安定性を第一に設計された実戦モデルなんだから！ 衝撃砲！」

ズドドンツ

と連射性の高い砲撃を近距離で受け、距離が開く。

そしてその瞬間を見逃さないように、鈴は連結状態の《双天牙月》を投擲した。

「ぐうっ！」

重い斬撃を受けきつたが、視界から鈴を見失う。

「たあああっ！！！」

一夏の真下、足首を掴んだ鈴はそのまま力任せに地面へと一夏を投げ飛ばす。

眩しい陽光に一瞬目を細める一夏の視界に影が落ちる。

「もらい！」

逆さまの格好にまま、鈴は衝撃砲の連射を浴びせる。

それが十発ほど直撃したところで、試合終了を告げるアラームが鳴り響いた。

言うまでもなく、一夏の敗北である。

「これであたしの二連勝ね。ほれほれ、なんか奢りなさいよ」

「ぐう……」

前半戦、後半戦ともに一夏の敗北で幕を閉じた実戦訓練。その後片付けを終えて、俺達いつもの面々は学食にやってきた。

一夏は鈴の調子に振り回されながらも、昼ご飯を食べている。

「ラウラ、それおいしい?」

「ああ。本国以外でここまでうまいシュニッツェルが食べられるとは思わなかった」

シャルと仲良しのラウラは、皿に盛られたシュニッツェル(仔牛のカツレツ)を一切れ切り分ける。

「食べるか?」

「わあ、いいの?」

「うむ」

「じゃあ、いただきます。えへへ、食べてみたかったんだ、これ」

ラウラから分けてもらったシュニツェルを頬張り、シャルは幸せそうな顔をする。

「ん〜！ おいしいね、これ。ドイツってお肉料理がどれもおいしくていいよね」

「ま、まあな。ジャガイモ料理もおすすめだよ」

自国のことを褒められて嬉しいのか、ラウラの顔は少し赤くなっていた。

「あー、ドイツってなにげに美味しいお菓子多いわよね。バウムクーヘンとか。中国にはあんまりああいうの無いから羨ましいっていえば羨ましいかも」

「そうか。では今度部隊の者に言ってフランクフルタークラントを送ってもらおうとしよう」

「ドイツのお菓子だと私はあれが好きですわね、ベルリーナー・プファンクーヘン」

そういったのはセシリアだったが、シャルはきょとんとして聞き返す。

「えっ。ベルリーナー・プファンクーヘンって、ジャム入りの揚げパンだよな？ しかも、バニラの衣が乗ってるからカロリーすごいと思うけど……セシリアはアレが好きなの？」

「わ、わたくしはちゃんとカロリー計算をするから大丈夫なのですわ！ そう、ベルリーナーを食べるときはその日その他に何も口

にしない覚悟で……」

そこまで覚悟して食べるものなのか？

「ジャム入り揚げパンか、確かにうまそうだ」

俺はあまり食べたくないな。その揚げパンは。

「セシリア、揚げパンが好きなら今度ゴマ団子作ってあげよっか？」

「それはどんなものですか？」

「中国のお菓子よ。餡子を餅で包んでゴマでコーティング。その後、揚げるの」

「お、おいしそうですわね！ ああ、でも、カロリーが……」

「ま、食べたくなったら言っつてよ」

「鈴さん……思っていたより良い人ですわね……」

「思っていたよりっつてなによ！ 思っていたよりっつて！」

相変わらず鈴とセシリアも仲がいいな。

「はあ……。それにしてもなんでパワーアップしたのに負けるんだ……」

「だから、燃費悪すぎなのよ。アンタの機体は。ただでさえシー

ルドエネルギーを削る仕様の武器なのに、それが二つに増えたんだからなおさらでしょ」

「その点、航はいいよね。ISを変更するだけでどの距離も対応出来るし」

「航さんと組んだら、簡単に負けそうにはありませんわね」

確かにパートナーによって支援したり、されたり出来るからな。

「ま、まあ、アレだな！ そんな問題も私と組めば解決だな！」

腕組みで啖呵を切ったのは箒だった。

一夏の『白式』と箒の『紅椿』は対極の関係だ。

片方はエネルギーを消滅させるのに対してもう片方はエネルギーを回復させる性質がある。

……実質俺には必要なく、GNドライブにより少しずつシールドエネルギーとGN粒子が回復するから問題ない。

「ざーんねん。一夏はあたしと組むの。幼馴染だし、甲龍は近接も中距離もこなすから、白式と相性いいのよ」

「ええい、幼馴染というなら私の方が先だ！ それに、なんだ。白式と紅椿は絵になるからな。……お似合いなのだ……」

一夏の幼馴染組が言い争っているなか、欧州組は俺のペアに立候補してきていた。

「んー……。でもなあ、別に最近ペア参加のトーナメントとかないなあ」

「いきなりあるかもしれないでしょうが」

「そのときは　　箒と組むかなあ」

「えっ？　私か!？」

急に話を振られて驚いたのが、定食を食べていた手が止まり、箸を置いた。

「な、何故だ？」

「前に組んだから」

「あ、そう……………」

一秒前まで輝いていた目はガラス色になり、箒は虚ろな視線で食事を再開する。

「そんなことだろうと思ってたぞ……………。はあ……………」

そんな箒の溜息で口火を切ったかのように、俺と女子が一齐に夏を非難する。

「一夏って酷いね……………」

「女心をなんだと思っているのだ」

「一夏さんの唐変木ぶりは時折許せませんわね」

「よし。次の特訓は全員で一夏に攻撃しよう」

「篝、烏龍茶を奢ってあげる。だから気を持ち直して」

「すまない、鈴。それと皆も」

申し訳なさそうにしている篝は、一夏以外の全員に類笑みを返した。

そんなこんなで昼食は終わり、俺達は午後の実習へと向けて再度アリーナへと向かった。

「人の後をつけて楽しいですか？」

俺以外誰もいないはずの廊下に向かって言葉を投げかけると、後ろから気配を感じた。

「うん。キミはまあまあできるね」

後ろを向くと扇子を持った女性が立っていた。

「俺に何の用ですか？」

「特に用はないよ。今日は単なる顔見せに来た」

「はあ……」

なんだろう、この人には隙を見せてはいけない気がする。

「それじゃあね。急がないと授業に遅れるよ」

壁の時計を見ると、開始まで五分を切っていた。

俺は急いでISスーツに着替えてアリーナに向かった。

「……遅刻の言い訳は以上か？」

一夏は間に合わず、織斑先生の授業に遅刻した。

「いや、あの……あのですね？ だから、見知らぬ女生徒が」

「ではその女子の名前を言ってみろ」

「だ、だから！ 初対面ですってば！」

「ほう。お前は初対面の女子との会話を優先して、授業に遅れたのか」

「ち、違っ」

しかし、そこに一夏の言葉は入り込む余地はなかった。

「デュノア、ラピット・スイッチの実演をしる。的はこの馬鹿者で構わん」

「……………」

一夏はシャルロットに視線を送る。

「それじゃあ織斑先生、実演を始めます」

「おう」

「あ、あの、シャル……………ロット、さん？」

「なにかな、織斑君？」

おそらく箒と鈴に頼まれたのだろう。二人の額に血管マークが見える。

「始めるよ、リヴァイヴ」

「ま、待つ」

バラバララララッ！！

一夏の言葉は銃弾にかき消された。

翌日。SHRと一限目の半分を使ってホールで全校集会が行われた。

内容は、今月中程にある学園祭についてだ。

それにしても、これだけの女子が集まると騒がしい。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

静かに告げた生徒会役員の声で、ざわつきが消えていった。

「やあみんな。おはよう」

「!?!」

壇上で挨拶をしている女子は、昨日廊下で現れた人物だった。

どうやら一夏も会っているみたいだ。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだね。私の名前は更識楯無。君達生徒の長よ。以後、宜しく」

頬笑みを浮かべて言う生徒会長は、異性同性を問わず魅了するみたいで、列のあちこちから熱っぽい溜息が漏れた。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルーを導入するわ。その内容というのは」

「こうなったら、やってやる……やあああってやるわ!」

「今日からすぐに準備始めるわよ! 秋季大会? ほっとけ、あんなん!」

秋季大会は大事なことだろう?

「というか、俺の了承とか無いぞ……」

一夏がそう言って生徒会長に目をやるよ、

「あはっ」

ウインクされても困るのだが……。

「よしよしっ、盛り上がってきたああ!」

「今日の放課後から集会するわよ! 意見の出し合いで多数決取るから!」

「最高で一位、最低でも一位よ!」

また周りが騒ぎ出したのでイライラする。……何故か俺の周囲だけ震えているのは気のせいだろうか。

かくして勝手に、俺と一夏の争奪戦が始まったのだった。

同日の教室にて放課後の特別HR。今はクラスごとの出し物を決めるため、盛り上がっていた。

「えーと……」

クラス代表として、一夏が意見をまとめる立場なのだが……。

内容が『男子のホストクラブ』『男子とツイスター』『男子とポッキー遊び』『男子と王様ゲーム』ってやりたくないものばかりだな、これ。

「却下」

案の定一夏も嫌らしく、拒否したらブーイングが響いた。

「あ、アホか！ 誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「私は嬉しいわね。断言する！」

「そうだそうだ！ 女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「男子は共有財産である！」

「他のクラスから色々言われてるんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」

「助けると思って！」

「メシア気取りで！」

最後のはなんだ。

一夏が助けを求めて視線を動かしているので、釘を刺しておこう。

「一夏、山田先生に振っても反応はみんなと同じこと言いそうだから止めた方がいいぞ」

「そうか。とにかく、もっと普通な意見をだな！」

「メイド喫茶はどうだ」

そう言ってきたのは、意外なことにラウラだった。

ラウラの発言により、クラス全員がぼかんとしている。

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるのだろう？ それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

いつもと同じ淡々とした口調だったが、あまりに本人のキャラにそぐわない言葉だったため、みんな理解するのに時間がかかった。

「え、えーと……みんなはどう思う？」

急に振られたせいかクラスの女子全員がきょとんとしたままだった。

「いいんじゃないかな？ 一夏と航には執事か厨房を担当しても

「例えばオーケーだよな」

そう言ったのはシャルだった。ラウラの援護射撃と思われるそれは、一組女子全員にヒットした。

「織斑君、執事！ いい！」

「それでそれで！」

「メイド服はどうする！？ 私、演劇部衣装係だから縫えるけど！」

一気に盛り上がりを見せるクラス女子一同。

今日は一体、何回イライラすればいいんだろう。俺の周囲の女子の顔色が悪いのだがどうかしたのだろうか。

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

そう言ったのは、またもやラウラであり、全員が注目されていることがわかると咳払いをした。

「ごほん。シャルロットが、な」

いきなり振られたシャルロットは困った顔をしている。

「え、えっと、ラウラ？ それって、先月の……？」

「うむ」

「き、訊いてみるだけ訊いてみるけど、無理でも怒らないでね」
不安げに告げるシャルに、クラスの女子は声を合わせて『怒りませんとも!』と断言をする。

かくして、一年一組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』に決まった。

「……いつまでぼんやりしてるの」

「眠……夜……遅……」

「お客様の前よ。ちゃんとしなさい」

「了解……」

「俺は気にしないのですが、いつもこんな調子ですか?」

「ええ。普段からこの調子だから、もう慣れてますので」

話していると突然、ドアが開いた。

「ただいま」

「おかえりなさい、会長」

入って来たのは会長と一夏だった。

「わー……。おりむーだ〜……」

「なんで航もここに？」

「虚先輩に案内されてきた」

俺は一夏が来るのはある程度わかっていた。

部活動に入っていないで特訓に明け暮れていたから苦情でもきたの
だろう。

「まあ、そこにはけなさないな。お茶はすぐに出すわ」

「は、はあ……」

「それと航君。私のことは楯無と呼んでね。たっちゃんでも可」

「その時の気分次第ですね」

いつもの六割り増しで眠そうな布仏さんは一夏を見つけて、上げ
た顔をテーブルに戻した。

「さっきも言ったけど、お客様の前よ。しっかりしさない」

「無理……。眠……。帰宅……。いい……。？」

「ダメよ」

最後の希望とばかりに単語だけの言葉で尋ねた布仏さんは、虚先輩の無情な回答に崩れ落ちた。

「えーと、のほほんさん？ 眠いの？」

「うん……。深夜……。壁紙……。収拾……。連日……」

「う、うん？」

「あら、あだ名だなんて、仲いいのね」

お茶の準備を虚先輩に任せて、楯無さんは腕組みして座席にかける。

「あー、いや、その……。本名知らないんで……」

「ええ〜！？」

布仏さんが初めて聞く大声で起き上がる。

「酷い、ずっと私をあだ名で呼ぶからてつきり好きなんだと思っ
てた〜……」

「いや、その……。ごめん」

「一夏、クラスメイトの名前覚えないと失礼だぞ」

一夏は悪いと思って頭を下げていると、ティーカップを持ってきた虚先輩が口を挟んだ。

「本音、嘘をつくのはやめなさい」

「てひひ、バレた。わかったよー、お姉ちゃん」

「お姉ちゃん？」

「ええ。私は布仏虚。妹は本音」

「むかーしから、更識家のお手伝いさんなんだよー。うちは、代々」

「えっ？ ていうか、姉妹で生徒会に？」

「そうよ。生徒会長は最強でないといけないけど、他のメンバーは定員数になるまで好きに入れていいの。だから、私は幼馴染の二人をね」

楯無さんが説明してくれる。

「お嬢様にお仕えするのが私どもの仕事ですので」

「あん、お嬢様はやめてよ」

「失礼しました。ついクセで」

そんなやりとりからして、更識家は有名な名家みたいだ。

「本音ちゃん、冷蔵庫からケーキを出してきて」

「はい。目が覚めた私はすごい仕事できる子」

相変わらずのゆっくりとした動作で、しかも眠気がまだ完全には抜けてないのか、その足取りはかなりあやしいが、不思議なもので転んだりせず、布仏さんは無事にケーキを持ってきた。

「それで対暗部用暗部が俺達に何の用ですか？」

「あら、調べるのが早いね。今日はそっちの方じゃなくて、生徒会長として話があるの」

それならそこまで警戒する必要ないか。

「一応、最初から説明するわね。一夏君と航君が部活動に入らないことで色々と苦情が寄せられていてね。生徒会はキミ達をどこかに入部させないと不味いことになっちゃたのよ」

「それで学園祭の投票決戦ですか……」

いい迷惑だな。こちらは一夏や篤、代表候補生の特訓をしているし、夜は支援機の『オーライザー』と『GNアーチャー』のプログラム作成で忙しいのに部活動をする余裕は無い。

「でね、交換条件としてこれから学園祭の間まで私が特別に鍛えてあげましょう。ISも、生身もね」

「遠慮します」

「そう言わずに。あ、お茶飲んでみて。美味しいから」

「……いただきます」

そう言って一夏は、紅茶をゆっくりと飲んだ。

「美味しいですね、これ」

「虚ちゃんの紅茶は世界一よ。次は、ケーキもどうぞ」

今度は俺もケーキを勧められるがまま食べる。

「そして私の指導もどうぞ」

「いや、だからそれはいいですって。大体、どうして指導してくれるんですか？」

「ん？ それは簡単。キミ達が弱いからだよ」

そう言われても仕方ないな。余計なことに巻き込まれたくないから、普段から力を抑えているので気にならない。

「それなりに弱くないつもりですが」

「ううん、弱いよ。無茶苦茶弱い。だから、ちょっとしたマシになるように私が鍛えてあげようかというお話」

俺が自らそうなるようにしたからこの程度我慢できるが、一夏は立ち上がり、楯無さんを指さしていた。

「じゃあ、勝負しましょう。俺が負けたら従います」

「うん、いいよ」

にこりと笑ったその顔は『畏にかかった』という表情をしていた。

「航君も勝負するのよ」

それを聞いて俺はこうなった人物を恨んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1026t/>

ISとエンジェロイド

2011年12月29日03時49分発行